

坂田遺跡発掘調査報告書

― 県道三田三葛線道路改良工事に伴う発掘調査 ―

2011年3月 財団法人 和歌山県文化財センター

坂田遺跡発掘調査報告書

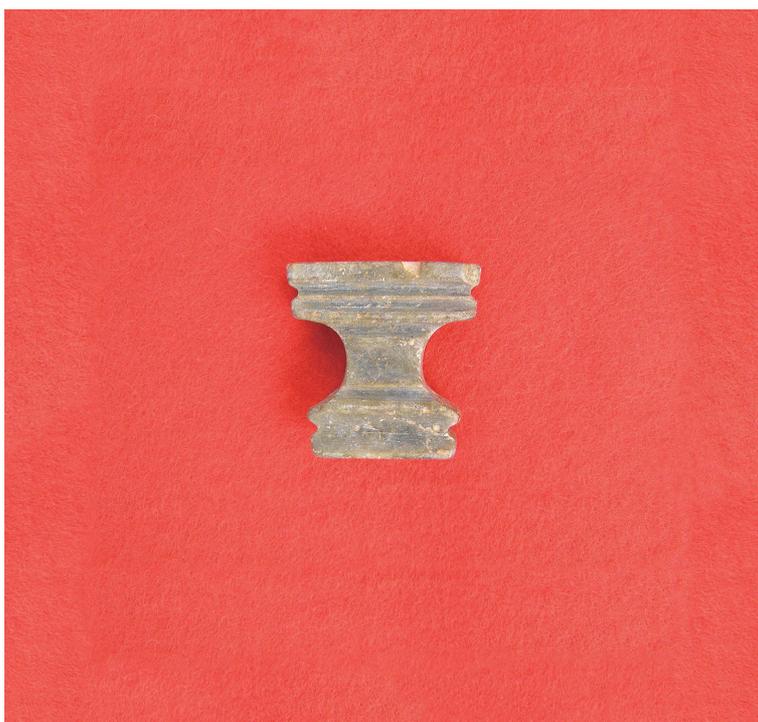
― 県道三田三葛線道路改良工事に伴う発掘調査 ―

2011年3月

財団法人 和歌山県文化財センター



調査地周辺遠景（北上空から）



A 区 琴柱形石製品 (実寸大)

序

坂田遺跡は竈山神社の北側に隣接する新発見の遺跡です。

本遺跡の北には弥生時代から古墳時代の集落遺跡である神前遺跡や、東側には弥生土器の散布地である和田遺跡の存在が知られています。また、周辺には独立丘陵上に築かれた和田古墳群、三田古墳群、坂田地蔵山古墳といったような多くの古墳も点在しています。

中でも、竈山神社境内の北側に所在する竈山神社古墳は、神武東征の折、この地で戦死したと伝えられる神武天皇の兄彦五瀬命墓としてよく知られています。

本調査は、この竈山古墳の北側裾をかすめる様な状況下で実施しました。発見した遺構や遺物は古墳時代と中世のものが中心でした。なかでも、県下では僅かしか出土例のない琴柱形石製品が出土したことは、特筆すべきことと言えます。

ここに、発掘調査の成果をまとめ、報告書を刊行いたします。本書が郷土の歴史を知る一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書作成にあたりご指導、ご協力をいただきました関係各位の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、今後とも当文化財センターへの一層のご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。

平成23年3月25日

財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 鈴木嘉吉

例 言

1. 本書は県道三田三葛線改良工事に伴う坂田遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および出土遺物整理作業は和歌山県海草振興局工務課道路グループより委託を受け、和歌山県教育委員会指導のもとに実施した。

現地調査は平成 21 年 11 月 12 日から平成 22 年 3 月 12 日までの期間で、1,947㎡の調査を実施した。

出土遺物整理作業は平成 22 年 11 月 1 日から平成 23 年 2 月 18 日までの期間で実施した。

3. 調査組織は下記のとおりである。

	【発掘調査】	【整理作業】
事務局 長	田中 洋次	田中 洋次
管 理 課 長	富加見泰彦	富加見泰彦
埋蔵文化財課長 (調査・整理担当)	村田 弘	村田 弘
埋蔵文化財課主任	佐伯 和也	佐伯 和也
埋蔵文化財課主任	尾藤 徳行 (財団法人 京都市埋蔵文化財研究所から派遣 平成 20 年 10 月 1 日～平成 21 年 12 月 31 日)	
非常勤専門調査員	寺西 朗平	

4. 調査および本書で使用した座標値は世界測地系第Ⅵ系で、北は座標北である。使用した標高は東京湾潮位 (T. P. +) である。

調査地の堆積土層の土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2005 年度版「新版標準土色帖」に準じた。

5. 航空写真撮影および基準点測量は写測エンジニアリング株式会社に委託した。
6. 遺構写真は尾藤、寺西、佐伯が、遺物写真は佐伯が撮影した。
7. 遺物図面の縮尺は土器類 1/4、石製品 1/2、遺物写真については任意の大きさに掲載した。
8. 調査で使用した調査コードは 09-01・435 (2009 年-和歌山市・遺跡番号) である。記録資料はこのコードを用いて管理している。
9. 発掘調査および遺物整理事業で作成した実測図・写真・台帳等の記録資料は財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。
10. 本書の編集、執筆は佐伯が担当した。
11. 発掘調査及び遺物整理業務に際し、関係機関の皆様方からご協力、ご教示を得た。ここに深く感謝を表します。

本文目次

序・例言

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 調査	4
第1節 調査の方法	4
第2節 調査の概要と基本層序	4
第3節 遺構と遺物	6
第4章 まとめ	25

挿図目次

第1図 遺跡所在地および周辺の遺跡	2
第2図 調査位置図	3
第3図 調査区基本層序	5
第4図 遺構平面図	7・8
第5図 A区遺構 010 土器出土状況・土層実測図	9
第6図 A区遺構土層実測図	11
第7図 A・B区遺構土層実測図	12
第8図 掘立柱建物1・2実測図	14
第9図 掘立柱建物3・4・5実測図	15
第10図 遺構 250 実測図	16
第11図 遺構 803 実測図	17
第12図 A区出土遺物実測図(1)	18
第13図 A区出土遺物実測図(2)	20
第14図 A・B区出土遺物実測図(3)	21
第15図 A区出土遺物実測図(4)	22
第16図 A・B区出土遺物実測図(5)	23
第17図 琴柱形石製品実測図	24

図 版 目 次

巻頭図版 1. 調査地遠景（北上空から）

巻頭図版 2. 琴柱形石製品

図版 1 上. 調査地近景（東上空から）

下. 調査地近景（西上空から）

図版 2 上. 調査区全景（東から）

中. A区北側全景（西から）

下. A区東側全景（東から）

図版 3 左上. A区遺構 010（溝）完掘状況（東から）

右上. A区遺構 010（溝）土器出土状況（西から）

左中. A区北側遺構 843（土坑）土層堆積状況（東から）

左下. A区北側遺構 843（土坑）完掘状況（東から）

右中. A区遺構 003（土坑）完掘状況（北から）

右下. A区遺構 003（土坑）内琴柱形石製品出土状況

図版 4 左上. A区掘立柱建物 1（東から）

右上. A区掘立柱建物 2（南西から）

左中. A区掘立柱建物 3（南西から）

左下. A区掘立柱建物 5（東から）

右中. 掘立柱建物 1 柱穴 589 断割（西から）

右下. 掘立柱建物 1 柱穴 304 断割（西から）

右下. 掘立柱建物 1 柱穴 294 断割（南から）

図版 5 左上. A区遺構 250（井戸）検出状況（南から）

左中. A区遺構 250（井戸）断割り状況（南から）

右上. A区遺構 803（井戸）検出状況（北から）

右中. A区遺構 803（井戸）断割り状況（南西から）

左下. B区遺構 1001（溝状遺構）・1013（溝状遺構）完掘状況（北から）

右下. B区遺構 1013（溝状遺構）・1015（溝状遺構）完掘状況（北東から）

図版 6 遺物掲載番号 1～4、6・7・10・14・15、18～20

図版 7 遺物掲載番号 21～26、29～37、40

図版 8 遺物掲載番号 38・39、41～44、49、52～56、59・61・62・64・65

図版 9 遺物掲載番号 67・68・70・71・74・75・77・78・81・82、84～86、88・90・96

図版 10 遺物掲載番号 89・91・97・99、100～102、107、110～114

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

坂田遺跡の発掘調査の契機は、和歌山県が県道三田三葛線改良工事を計画し、その工事予定地の一部が、埋蔵文化財包蔵地である竈山神社古墳に及んだため、和歌山県教育委員会から和歌山県に確認調査を要する旨の通知がなされた。

確認調査は、生涯学習局文化遺産課が平成21年1月に、道路建設予定地内の竈山神社古墳の隣接する北側に試掘トレンチを設定し、確認した結果、周知の埋蔵文化財包蔵地以外に遺跡が展開することが予想されたため、先のトレンチの更に北側にもトレンチを設定して遺構を確認している。

また、同年2月にも西側の包蔵地展開範囲確認のため試掘調査を実施し、道路建設予定地内での調査の必要範囲を決定した。

故に、今回の本発掘調査に至った坂田遺跡は新発見の遺跡として、平成21年6月8日付けで和歌山県埋蔵文化財包蔵地として新規認定された。

第2節 調査の経過

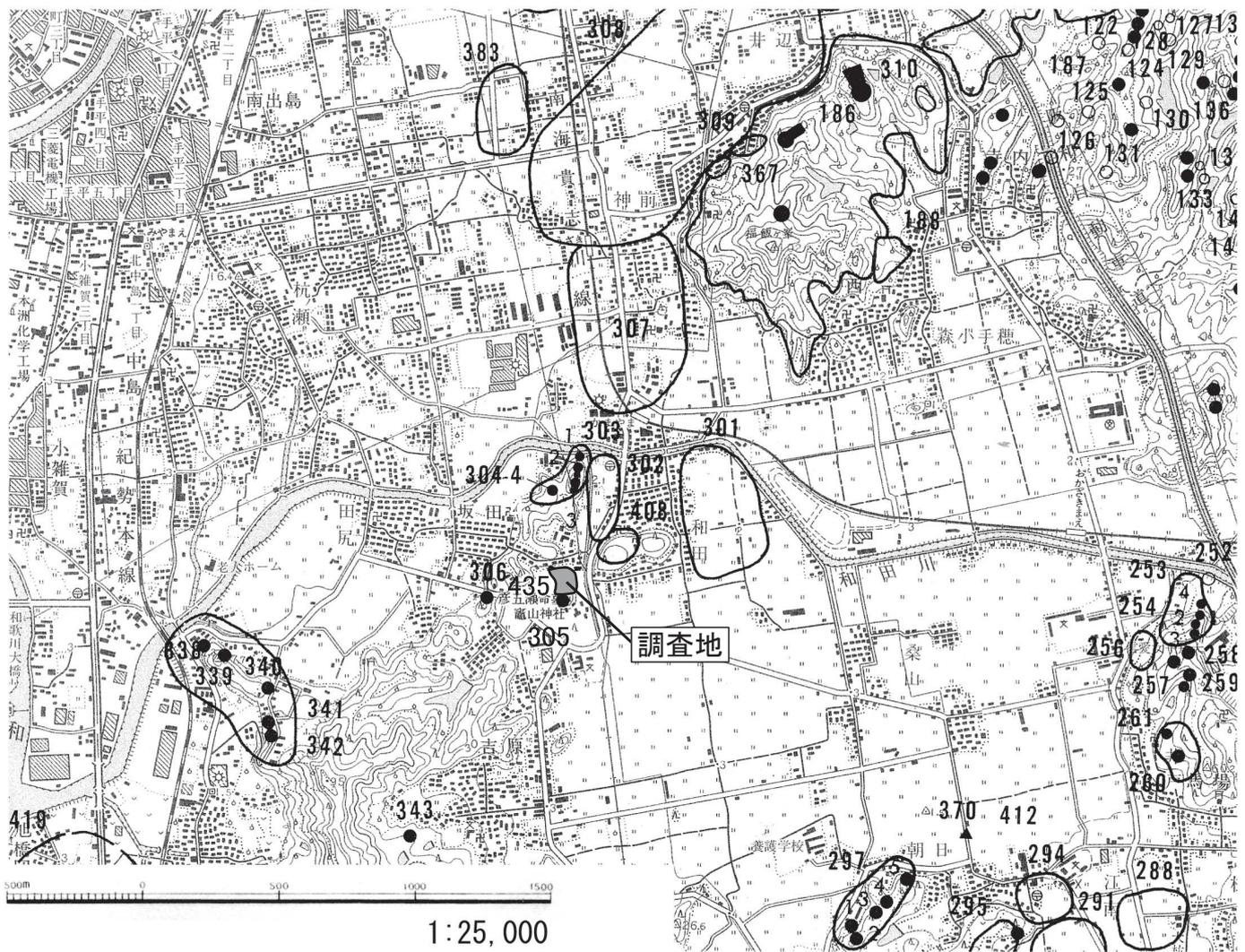
発掘調査は平成21年11月半ばから平成22年3月半ばにかけて工事請負方式で実施した。ラジコンヘリコプターによる航空写真撮影と調査地内の4級基準点打設は専門業者に委託した。また、平面図、土層図等の実測作業は手測りで行った。

調査は対象地一面に雑草が夥しく茂り、まず、これの刈取り作業から行わなければならなかった。刈取り終了後、調査対象地の範囲確定のための測量を行い、調査地外の東側と西側を排土置場とし、機械掘削作業にかかった。機械掘削終了後、人力で包含層を掘削し、この土も機械掘削同様に排土置場にベルトコンベアーで流した。次に、遺構検出作業は東側から西側にかけて行った。調査地は東側が微高地で若干西側より高くなっており、遺構密度が高く、遺構配置図の作成、個別遺構等の実測作業および写真撮影に手惑った。

調査途中で、当初から調査対象範囲になかった箇所を対象地に追加（本文中のA区北側）し、委託者（和歌山県）と平成22年2月23日付で変更契約を交わした。

調査も最終段階の遺構の断割り作業時期に降雨日が続き、実測作業や写真撮影に難をきたしたが、重機による埋戻し作業も無事終了し、平成22年3月12日に調査事務所の備品撤収、事務所解体を終了した。

また、調査と並行して応急整理作業として、出土した土器の洗浄作業を行い、遺物登録台帳作成用の出土遺物写真撮影を登録番号毎にデジタルカメラで撮影した。



第1図 遺跡所在地及び周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	いせきめい	所在地	種別	時代	立地	遺跡概況
186	井辺前山古墳群	いんべまえやまこふんぐん	井辺・岡崎・寺内・神前・西・森小手穂	古墳群	古墳	山腹	前方後円墳15基、円墳60基
297	赤津古墳群	あかつこふんぐん	朝日	古墳群	古墳	丘陵	5基
301	和田遺跡	わだいせき	和田	散布地	弥生	沖積地	弥生土器
302	和田岩坪遺跡	わだいわつぽいせき	和田	散布地	弥生～古墳	沖積地	弥生土器、土錘、須恵器、土師器
303	和田古墳群	わだこふんぐん	和田	古墳群	古墳	丘陵	4基
304-4	和田4号墳	わだよんごうふん	和田	古墳	古墳	丘陵	前方後円墳？
305	籠山神社古墳	かまやまじんじゃこふん	和田	古墳	古墳	丘陵	円墳
306	坂田地蔵山古墳	さかたじぞうやまこふん	坂田	古墳	古墳	丘陵	円墳？、横穴式石室、直刀、須恵器
307	神前遺跡	こうざきいせき	神前	散布地	弥生	沖積地	弥生土器、石包丁、紡錘車、石斧、土師器
310	森小手穂埴輪窯跡	もりおてぼはにわかまあと	森小手穂	窯跡	古墳	山麓	埴輪(円筒、形象)
338	アンドの鼻古墳	あんどのはなこふん	三葛	古墳	古墳	丘陵	組合式石棺、土師器(壺)
343	吉原古墳群	よしはらこふんぐん	吉原	古墳	古墳	丘陵	前方後円墳？
367	井辺Ⅲ遺跡	いんべさんいせき	井辺	散布地	縄文	丘陵麓	
399～342	三田古墳群	さんたこふんぐん	三葛	古墳群	古墳	丘陵	4基
408	和田Ⅱ遺跡	わだにいせき	和田	集落？	弥生	丘陵	溝状構造、弥生土器

編集・発行 和歌山県教育委員会 平成19年3月31日発行
和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図から転載

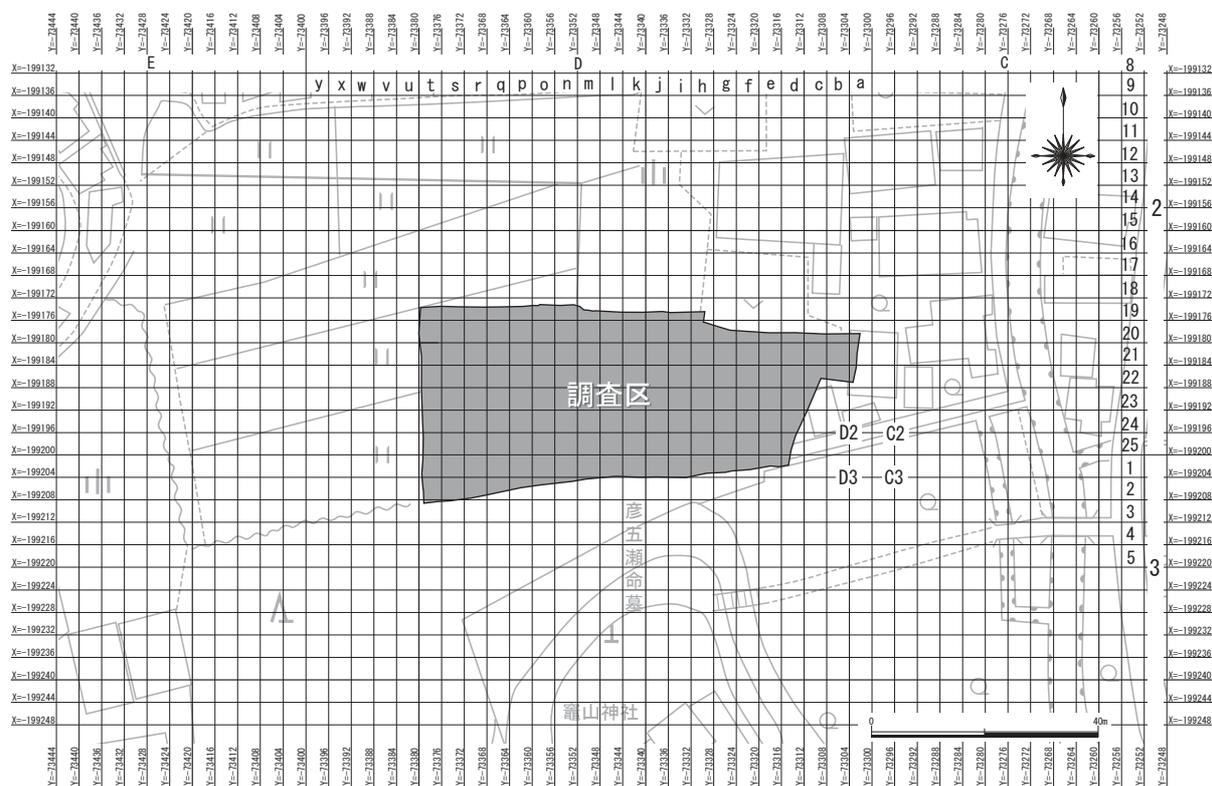
第2章 遺跡の位置と環境 (第1図)

坂田遺跡は和歌山平野の南部にあり、和田川下流域の左岸の低湿地から南に位置する。

調査地周辺には、北側に井辺山古墳群、和田古墳群、西側には坂田地蔵山古墳、三田古墳群などが所在する丘陵がある。集落遺跡としては調査地の東側を北流する名草川の東、あるいは北側を西流する和田川の北側、南側に弥生時代を中心とする神前遺跡、和田岩坪遺跡、和田Ⅱ遺跡、和田遺跡などが所在する。これらの遺跡の所在するところは、律令時代の条里型地割が顕著に遺っていることでもよく知られている。

調査地南側の竈山神社に隣接して、宮内庁御陵である竈山神社古墳が「彦五瀬命墓」として管理されている。彦五瀬命の逸話は「日本書紀」に詳しく記載され、命は神武天皇の兄であり、神武東征の折、流れ矢に当たり負傷し、この竈山の地で没したことが記されている。これが「延喜式」の諸陵式にみえる竈山墓で、紀伊国唯一の陵墓である。

また、竈山神社は永徳元年紀伊の国造家によって鶺飼新五郎が神主職に任じられ、中世を通じて鶺飼家が世襲していたと考えられる。天正13年3月豊臣秀吉の紀州攻めで社殿をはじめ神宝や古記録などが焼失し、和太荘内の社領八町八反も没収されたと鶺飼家文書に伝わる。慶長5年に浅野幸長が小祠を再建し、寛文9年には徳川頼宣が社殿を再興したと伝わる。これと時期を同じくして不明確になっていた竈山墓の区域を設定し、殺生を禁止した。その後も荒廃したが、明治14年墓域を現在地に画定し、陵墓と社殿が区別され現在に至っている。



第2図 調査位置図

平面図内座標系第6系 方位は標準北を表示

第3章 調査

第1節 調査の方法（第2図）

調査地の地区割は国土座標第VI系（世界測地系）を使用し、坂田遺跡を網羅する範囲の北東に基点を設けた。坂田遺跡の基点は（ $X = -199.00\text{km}$ 、 $Y = -73.00\text{km}$ ）とした。次にこの基点から西方向と南方向にそれぞれ一辺 100 m を 1 単位とした正方形区画を大区画とした。これの呼称は東西方向を A～Y、南北方向を 1～25 とした。次に、大区画内を 4 m 毎に割り、同様に東西方向を a～y、南北方向を 1～25 とし、小区画を設定した。調査時の包含層や遺構の遺物取上げは、この小区画の 4 m メッシュの地点に地区杭を打設し、取上げた。

調査の記録作成は図面作成と写真撮影とに拠った。記録図面の作成は、遺構配置図は $S = 1/100$ で、遺構平面図は $S = 1/20$ 、個別遺構平面図・断面図は $S = 1/10$ と $S = 1/20$ 、調査地壁面土層図は $S = 1/20$ で手測り実測を行った。写真撮影は 4 × 5 判モノクロームフィルム・カラーリバーサルフィルム、6 × 7 判モノクロームフィルム・カラーリバーサルフィルム、35mm カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラを使用した。なお、完掘状況はラジコンヘリコプターで上空写真撮影を行った。遺物はコンテナ（28 リットルサイズ）で 32 箱出土した。

第2節 調査区の概要と基本層序（第3図）

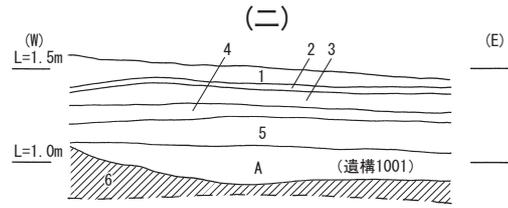
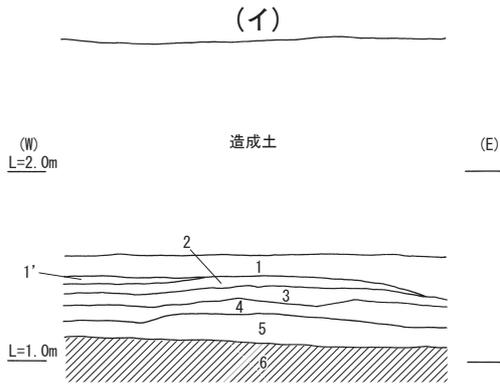
調査地の現況は荒蕪地および宅地跡で、地形的に東から西に旧水田の段差が付いていた。調査の便宜上、東側の高い地区を A 区、西側の低い地区を B 区と呼称した。調査途中で同道路敷き内の A 地区の北側に当たる箇所を追加調査した。この地区の呼称を A 区北側とした。現況は民家の畑地で、周囲をコンクリート基礎で囲い、その上にブロック積みをし、此处でも多量の片岩礫の混ざった造成土で 1.1～1.2 m の嵩上げをしていた。また、調査区周囲はコンクリート基礎により約 2.0m～2.8m 幅で攪乱されていた。

調査前の現地盤の標高は A 地区では約 2.5 m～1.7 m、B 地区では約 1.7 m～1.5 m、A 区北側では約 2.7 m～2.6 m を測る。調査面積は 1,947 m^2 である。

【A区】

基本的層序は第1層（耕作土）、第2層（床土）、第3層、第4層は土色が若干ちがうだけで、基本的には同じで、双方ともに片岩礫の小片が混じるところから中世の整地土と考えられる。第5層は中世包含層で 10YR4/4（褐）と 10YR6.5/1（褐灰）のシルトの混層である。第6層は地山と考えられる層で黄橙色のシルト質である。第1層上には約 40～60cm の厚みで、近現在の嵩上げと考えられ、多量の片岩礫（2～50cm 大）の入った整地土が認められ、その上層は表土となっていた。なお、床土は非常に薄く、場所によっては認められない。

検出した遺構には古墳時代の溝、土坑、井戸状遺構、掘立柱建物、中世の土坑、溝、柱穴、素

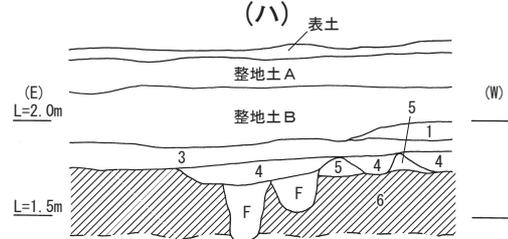
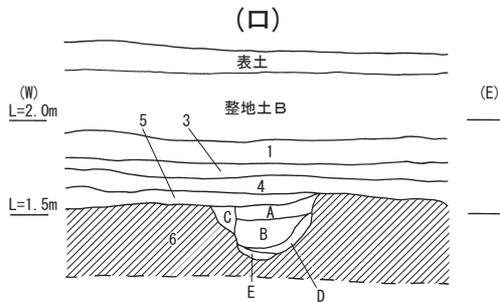


(イ) 地点土層名

1. 耕作土
- 1'. 耕作土
2. 床土
3. 10YR6/1(褐灰)微砂シルト
φ0.2～0.5cm 大のマンガン粒 2% 入る (中世包含層)
4. 2.5Y7/1(灰白色)シルトに 7.5YR7/8(黄橙色)シルトが混じる
φ0.2～0.5cm 大のマンガン粒 2% 入る (中世包含層)
5. 5Y7/1(灰白色)シルト 2.5Y6/6(明黄褐色)シルトを淡い斑状に少量含み、粗砂も少量含む
6. 7.5YR5/3(にぶい褐色)シルトに 10YR7/1(灰白色)シルトが混じる (地山)

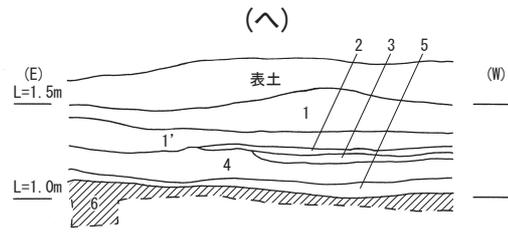
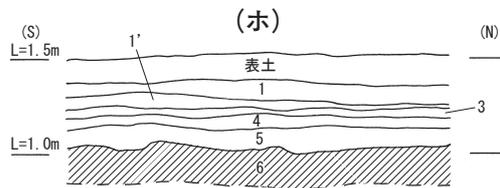
(二)

1. 耕作土 2.5Y3/1(黒褐色)シルト・細砂
2. 床土 5YR6/3(黄橙色)シルト
3. N7/0(灰白色)シルト 粗砂を多量に含み φ2～10mm の礫を少量含む
4. 5Y6/3(オリーブ黄色)シルト φ2～5mm の礫をわずかに含む
5. 5Y7/1(灰白色)シルト 2.5Y6/6(明黄褐色)シルトを少量含み、粗砂も少量含む
- A. 2.5Y7/1(灰白色)シルト 遺構 1001 の埋土、2.5Y6/6(明黄褐色)シルトが縦方向の帯状に少量入る、マンガン粒をわずかに含む
6. 2.5Y7/4(浅黄色)シルト(地山)



(ロ)・(ハ) 地点土層名

1. 耕作土 7.5YR5/4
 3. 10YR6/4(にぶい黄橙色)微砂混じりのシルトに φ0.5～2.0cm の礫が 3% 入る
 4. 10YR6/3(にぶい黄橙色)微砂混じりのシルトに φ0.5～2.0cm の礫が 3% 入る
 5. 10YR4/4(褐色)シルトと 10YR5.5/1(褐灰色)シルトの混層 φ0.5cm 内外のマンガン粒少量入る
 6. 10YR8/7(黄橙色)シルトに φ0.2～0.5cm のマンガン粒 10% 入る (地山)
- 遺構埋土
- A. 10YR6/2(灰黄褐色)砂質シルトに 7.5YR4/4(褐色)のマンガン粒が 3% 入る
 - B. 10YR6/2(灰黄褐色)砂質シルト A 層に比べてマンガン粒が少ない(1～2%)
 - C. 10YR6/2(灰黄褐色)砂質シルト A 層に比べてやや褐色が強い
 - D. 10YR7/1(灰白色)砂質シルト
 - E. 10YR6.5/1(褐色)砂質シルト
 - F. 7.5YR6/1(褐灰色)シルトと 10YR6/1(明黄褐色)シルトの混層 φ0.2～0.3cm の片岩礫 2% 入る



(ホ)・(ヘ)

1. 耕作土 2.5Y3/1(黒褐色)シルトに細砂を含み、10YR7/8(黄橙色)シルトが混じる
φ0.1～0.2cm 大のマンガン粒 1% 入る
2. 床土 5YR6/3(黄橙色)シルト
3. 10YR6.5/1(褐灰色)シルト
4. 5B7/1(明青灰色)シルトに 10YR5/8(黄褐色)微砂混りシルトが入る
5. 2.5Y7/4(浅黄色)シルト
6. 5B7/1(明青灰色)シルトに φ0.5～1.5cm のマンガン粒 7.5Y4/3(褐色)10% 入る



第3図 調査区基本層序 (S = 1/40)

掘り井戸などがある。遺構は地山直上で検出した。古墳時代の遺物は中世の整地層とした第3層・第4層から土器の大部分が出土している。

【A区北側】

基本的層序は上層から第1層（耕作土）、第2層（床土）、第3層・第4層は水平堆積を呈し、中世の水田層と考えられる。第5層も出土遺物や水平堆積をすることから中世水田層の可能性が高い。遺構検出面は南側のA区に比べ約0.4m程度低くなっていた。第4層から砂岩系材質の勾玉が出土した。

【B区】

現地盤の標高はA区と比高差があり、約1.0m低くなっていた。また、堆積の様相はA区やA区北側と全く異なり、湿地状の堆積層を形成する。基本層序は第1層（耕作土）、第2層（床土）、第3層～第5層は粘性度の強いシルトで場所によっては色調が異なる。第6層は地山と考えられる強粘性のシルト層である。遺構は地山上で検出した。

第3節 遺構と遺物

【A区】

検出した遺構には古墳時代の溝、土坑、井戸状遺構、掘立柱建物、中世の土坑、溝、柱穴、素掘り井戸などがある。遺構は地山上で検出した。主だった遺構について次に記述する。

遺構 010（第4・5図・12図、図版3） 調査区東端で検出した溝状遺構である。南へ湾曲して、遺構448（中世整地土範囲）で削平され遺構445（溝状遺構）の東側で検出した。底面の高さから東流していたと考えられる。検出長は途切れた箇所を含めると約20m、幅は1.0～1.5mを測る。残存の深さは0.15～0.20mを測る。埋土は灰色系シルトで、均等にレンズ状の堆積を呈する。この溝からは第12図の遺物が出土している。（1・2）は弥生後期後半から庄内の時期と考えられる広口壺で、（1）は口縁端部外面と肩部に二段の竹管文が巡る。（3～10・13）は甕で、（3・4）は口縁端部にキザミを施し、口縁中程に接合痕が見られる。弥生後期後半～庄内に時期と考えられる。（5）は口縁部が直線的に屈曲する。V様式型甕である。（11・12・14）は鉢で、（12）は台付き鉢か。（15・16）は有孔鉢で、（16）は孔が大きく直径2cmを測る。（18～20）は高坏の脚部で、（18・19）は内面をケズリ、外面は横方向のナデを施す。庄内～布留の時期である。（20）は庄内期前半の椀型高坏である。（21～25）は瀬戸内型土錘で両端に直径5～7mmの孔を穿つ。

A区中程北側で検出し得たほぼ円形を呈する、規模0.5m×0.45mの小土坑**遺構(464)**からは弥生後期後半から庄内期にかけての壺（27）、鉢（28）や口縁部キザミ後ナデを施す甕（26）が出土している。

遺構 460・遺構 540（第4図） 遺構調査区中央付近の南壁にかかって検出した。双方ともに試掘時（1トレンチ・2トレンチ）に確認している。双方の溝は中世の整地土（遺構448）や



第4図 遺構平面図 (S = 1/200)

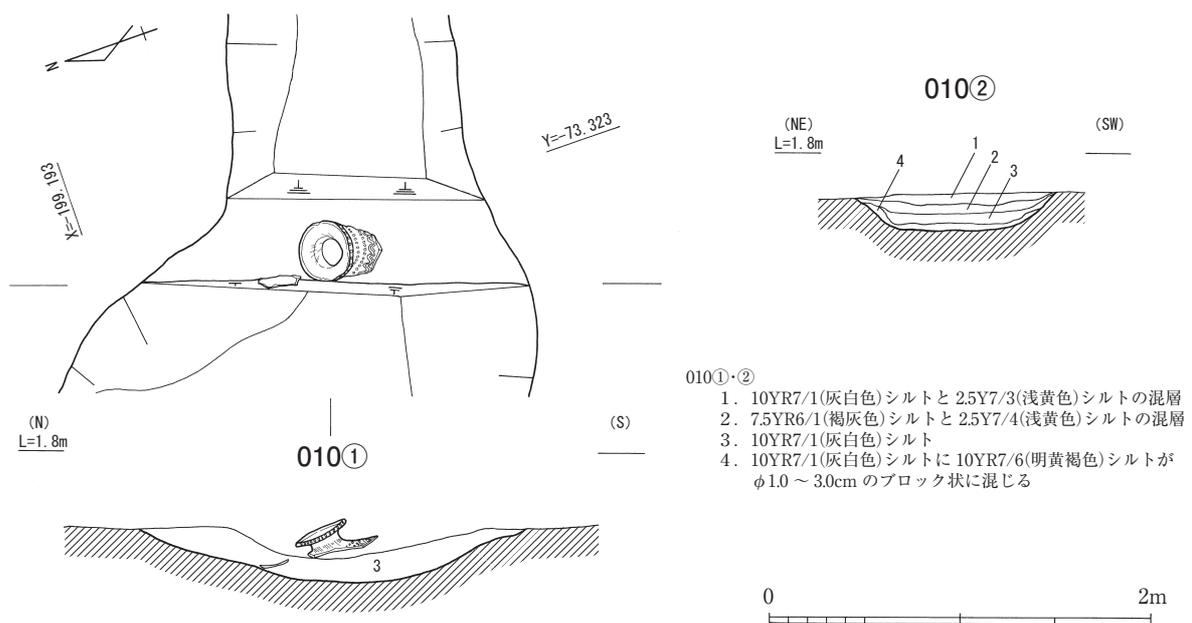
溝状遺構（445）で途切れはするが、その埋土の状況や規模、位置関係から同一のものと考えられ、幅は約 1.30～1.80m を測り、残存の深さは約 0.3m を測る。ただ、調査区南壁際で双方が終息するように浅くなる。埋土は基本的に 3層に分層でき、上層は褐色系、中層は灰黄色系、下層は黄褐色系を呈するシルトで、細かな片岩礫を全体に含む。ここからの出土遺物は土師器細片が十数点出土している。

遺構 704 調査区西側の南端で検出した。南側は調査区外に延び、その全容は不明である。検出し得た形状から方形の土坑と考えられる。規模は東西約 2.0m、南北約 1.40m 以上を測る。残存の深さは約 1.60m を測る。埋土は基本的に 3層に分層され、上層から褐色系シルト、中層は青灰色シルト、下層は暗青灰色シルトである。底には 4～10cm の厚みで均質な細砂が堆積する。底の標高は -0.40 を測り、湧水があることから、この遺構も井戸と考えられる。ここからの出土遺物の殆どは上・中層からのもので、(29～32) はⅡの 2段階の時期と考えられる須恵器の杯蓋や身、提瓶の口縁部 (32) である。(33) は土師器椀である。内面は篋ケズリを施す。また**遺構 332** のピット状遺構からも同時期の須恵器杯身 (37) が出土している。

遺構 560 (第 6 図) は 2.6 m × 2.3 m 規模の土坑状遺構である。深さは約 0.2 m を測る。埋土はレンズ状に堆積する。ここからは (34) の丸底と考えられる小型の甕が出土している。内外面の摩耗が激しい。

遺構 230 調査区東端で検出した南北方向に延びる溝である。ここからは (35) の広口壺口縁部と (36) 鉢が出土している。時期的には庄内期～布留期と考えられる。

遺構 660 (第 6 図) A 区の北西で検出した土坑状遺構である。形状はおおむね長方形で、規



第 5 図 A 区遺構 O10 土器出土状況・土層実測図 (S = 1/40)

模は長軸 3.36 m、短軸 1.16 mを測る。深さは 0.22 mである。上～中層にかけては褐色シルト、黄橙色のシルトがレンズ状に堆積する。ここからの遺物は、遺構の大きさの割りに少なく土師器片が 1 片出土しただけである。

他に、遺構 570（ピット状遺構）や遺構 631（土坑状遺構）からも古式土師器の細片が数片出土したに留まる。

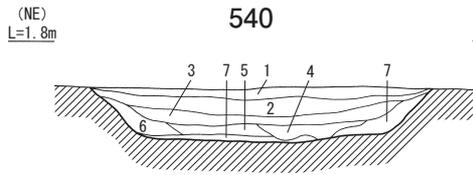
調査地ほぼ中央の南側で掘立柱建物 4 棟を検出した。発掘当初は、建物 1 を構成する柱穴から古式土師器に混じって黒色土器の細片が 1 片出土し、古代に帰属する建物群と考えたが、遺物整理時に確認まちがえと判明した。従って、これらの帰属する時期は古墳時代と考えられる。全ての建物は割合に遺りが良好で、中でも掘立柱建物 2・3 の柱穴は残存状態が良好であった。また、この 4 棟は主軸方位の違いから時期差が考えられる。掘立柱建物 2・3 は軸線が同じであるため同時期と考えられるが、掘立柱建物 1、掘立柱建物 4 は先の 2 棟と軸線を異にするため、これら 4 棟間で 2 時期あるいは 3 時期あるものと思われる。掘立柱建物 1～4 を構成する柱穴からは、細片ではあるが割合に多い数が出土している。なお、実測に耐えうる遺物は皆無であった。

掘立柱建物 1（第 4・8 図、図版 4）南北棟の建物である。南側は調査区外に延び、その全容は不明である。主軸は 12° 東偏する。規模は桁行 3 間以上（間尺：北から 1.20m、1.60m、1.64m）、梁行 2 間（間尺：東から 1.82m、1.88m）の総柱建物である。掘方の平面形状は隅丸方形で、一辺約 0.6～0.75 m、残存の深さは約 0.3～0.5 mを測る。埋土は黄灰色系のシルトである。この建物を構成する柱穴からの遺物の総数は 215 片出土し、この内、古式土師器 214 片、須恵器甕片 1 であった。柱穴（576）と柱穴（581）の遺物が接合できた。

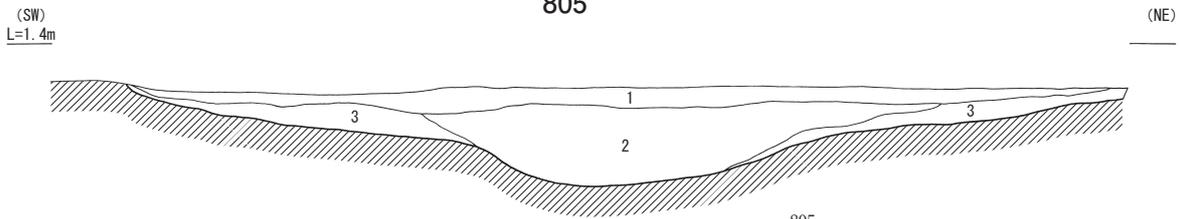
掘立柱建物 2（第 4・8 図、図版 4）南北棟の建物である。主軸は 47° 東偏する。規模は桁行 2 間（間尺：東から 1.64m、1.70m）、梁行 2 間（間尺：北から 1.42m、1.38m）の総柱建物である。掘方の平面形状は隅丸方形で、規模は一辺 0.5～0.55 mを測る。残存の深さは 0.5～0.65 mを測る。埋土は暗黄灰色系のシルトである。建物を構成する柱穴からの出土遺物の総数は 43 片出土し、すべて古式土師器である。柱穴（339）からは出土総数の 5 割量が出土した。

掘立柱建物 3（第 4・8 図、図版 4）この建物も東西棟である。主軸は 47° 東偏する。規模は桁行 3 間（間尺：東から 1.64m、1.66m、1.60m）、梁行 2 間（間尺：北から 1.95m、2.06m）の側柱建物である。掘方の平面形状は隅丸方形で、規模は一辺 0.45～0.55 mを測る。残存の深さは 0.5～0.7 mを測る。桁行方向の北列は建替えが認められ、柱穴の埋土は黄灰色系ないし暗オリーブ色のシルトである。この建物を構成する柱穴からの総出土破片数は 127 片で、すべて古式土師器であった。

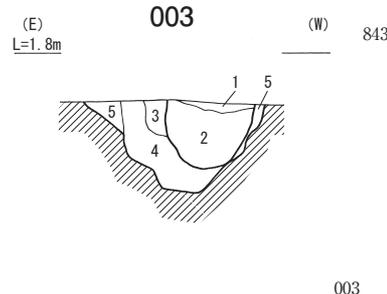
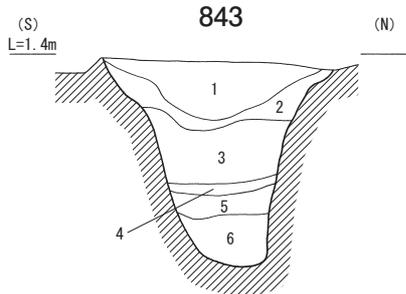
掘立柱建物 4（第 4・8 図）東西棟の桁行 2 間（間尺：東から 1.74m、1.64m）、梁行 1 間（間尺：1.64m）の建物である。主軸はほぼ北で、僅かに 3° 東偏する。掘方の規模は一辺 0.4～0.55 mの



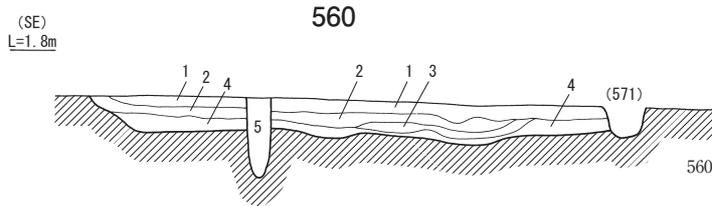
- 540
- 10YR4/4(褐色)シルト φ0.2～0.8cmの片岩礫その他細礫を少量含む
 - 2.5Y3/3(暗オリーブ褐色)シルト φ0.2～1.0cmの片岩礫を少量含む
 - 2.5Y4/4(オリーブ褐色)シルト φ0.2～0.5cmの片岩礫を少量含む
 - 10YR5/2(灰黄褐色)シルト φ0.2～0.5cmの細礫を微量含む
 - 2.5Y5/2(暗灰黄色)シルト φ0.2～0.5cmの細礫を微量含む
 - 2.5Y6/1(黄灰色)シルト
 - 10YR5/4(にぶい黄褐色)シルト
 - 2.5Y6/6(明黄褐色)シルト



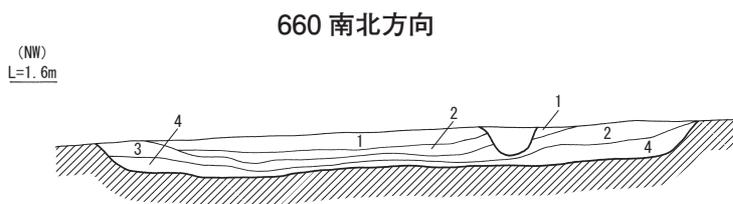
- 805
- 2.5Y5/3(黄褐色)シルト
 - 10YR3/3(暗褐色)シルト 炭化物を少量含む
 - 10YR4/2(灰黄褐色)シルト



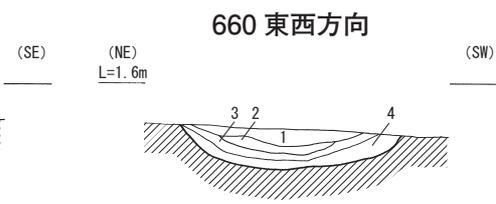
- 843
- 10YR5/3(にぶい黄褐色)シルト φ0.5～1cmの礫を微量に含む
 - 2.5Y4/6(オリーブ褐色)シルト 粗砂を少量、φ0.5～0.8cmの礫を微量含む
 - 2.5Y4/1(黄灰色)シルト
 - 2.5Y4/6(オリーブ褐色)粗砂 第3層のシルトを少量含む
 - 2.5Y3/1(黒褐色)シルト φ0.2～0.8cmの礫を少量含む
 - 10BG5/1(青灰色)シルト 10YR4/4(褐色)粗砂をブロック状に含む



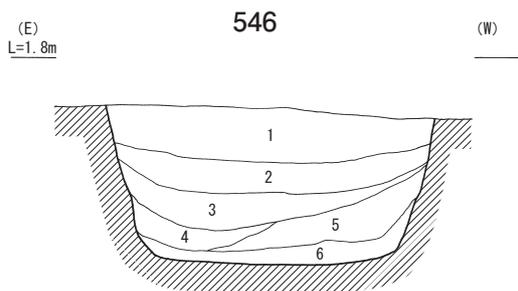
- 003
- 5Y7/1(灰白色)シルト
 - 2.5Y6/1(褐灰色)シルトにφ2.0～4.0cmの10YR7.5/8(黄褐色)シルトがブロック状に混じる
 - 10YR7.5/8(黄褐色)シルトと10YR5.5/2(灰黄褐色)シルトの混層
 - 10YR5/1(褐灰色)シルト
 - 10YR6/2(灰黄褐色)シルトと10YR7.5/8(黄褐色)シルトの混層
- 560
- 7.5YR4/3(褐色)シルトにφ0.2～3.0cm大の片岩礫を少量含む
 - 7.5YR4/4(褐色)シルトにφ0.2～3.0cm大の片岩礫を少量含む
 - 7.5YR4/5(褐色)シルトにφ0.2～3.0cm大の片岩礫を少量含む
 - 10YR8/8(黄褐色)シルトに7.5YR5/4(にぶい褐色)シルトと10YR7/1(灰白色)シルトがブロックに混じる
 - 7.5YR3/2(黒褐色)シルト



660 南北方向



660 東西方向



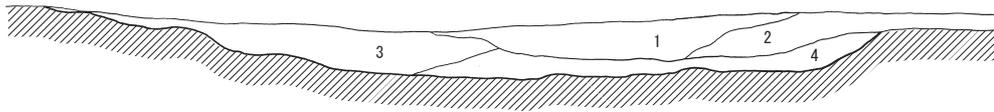
- 546
- 10YR4/4(褐色)粗砂混じりのシルト φ5.0～10cmの片岩礫を微量含む
 - 10YR4.5/3(褐色)シルト φ1～3cmの片岩礫を少量含む
 - 10YR3/4(暗褐色)粗砂混じりのシルト φ1～3cmの礫を少量含む
 - 2.5Y6/6(明黄褐色)シルト 5BG5/1(青灰色)シルトを少量含む 炭化物を微量含む、φ5～10cmの礫を少量含む
 - 10YR3/3(暗褐色)シルト 第3層と酷似するが色調が第3層に比べやや暗い φ0.5～1.5cmの片岩礫を少量含む
 - 5BG5/1(青灰色)シルト φ0.1～0.3cmの片岩礫を微量含む



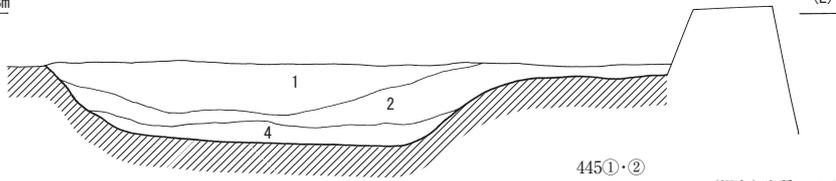
第6図 A区遺構003・540・546・560・660・805・843土層実測図 (S = 1/40)

(W)
L=1.8m

445①



(W)
L=1.8m



445②

445①・②

1. 7.5YR4/4(褐色)砂質シルトにφ0.2~10cmの片岩礫が40%入る
2. 7.5YR5/6(明褐色)シルトと7.5YR5/2(灰褐色)シルトの混層にφ0.5~8cmの片岩礫が3%入る
3. 7.5YR5/1(褐灰色)シルトに7.5YR6/8(橙色)シルトがφ3~10cmのブロック状に混じる
4. N6.5/0(灰色)シルト

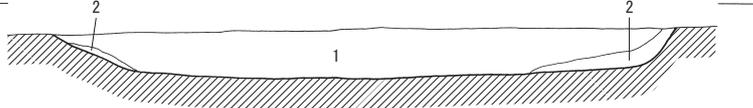
(W)
L=1.2m

1001①



(W)
L=1.2m

1001②

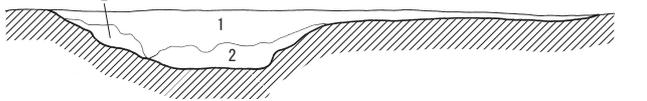


1001①・②

1. 2.5Y7/1(灰白色)シルト 酸化鉄分による2.5Y6/6(明黄褐色)シルトが縦の帯状に入る
2. 2.5Y7/1(灰白色)シルトに2.5Y7/4(浅黄色)シルトが混じる

(W)
L=1.2m

1015

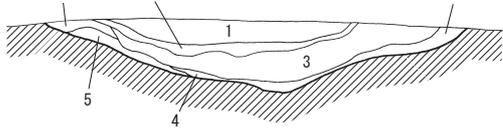


1015

1. 10YR4/1(褐灰色)シルト
2. 5BG4/1(暗青灰色)シルトに5Y6/1(灰色)シルトを含む

(E)
L=1.2m

1013



1013

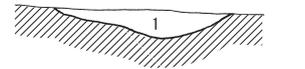
1. 2.5Y7/2(黄灰色)シルト
粗砂とφ0.2~0.5cmの片岩礫を少量含む
2. 10YR4/1(褐灰色)シルト
粗砂とφ0.2~0.5cmの片岩礫を微量含む
3. 5PB6.5/1(明青灰色)シルト
粗砂とφ0.2~0.5cmの片岩礫を微量含む
4. 5PB7/1(明青灰色)シルトに5Y8/4(淡黄色)シルトが混じる
5. 2.5Y8/6(黄色)シルトに5PB6.5/1(明青灰色)シルトが混じる

1003

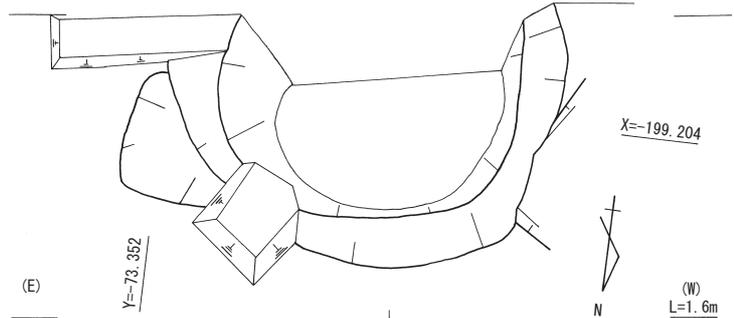
1. 5PB6.5/1(明青灰色)シルト。粗砂を微量含む

(E)
L=1.2m

1003



704



704

1. 10YR4/2(灰黄褐色)シルト
φ0.2~4.0cmの片岩礫と炭化物を微量含む
2. 10YR4/1(褐灰色)シルト
φ0.2~1.0cmの片岩礫と炭化物を微量含む
3. 10YR4/3(にぶい黄褐色)シルトにφ0.2~0.5cmの片岩礫を微量含む
4. 2.5Y4/4(オリブ褐色)シルトに5BG5/1(青灰色)シルトを含む
5. 5BG5/1(青灰色)シルトに2.5Y6/6(明黄褐色)シルトを含む
6. 10BG4/1(暗青灰色)シルト
7. 10G7/1(明青灰色)細砂
8. 第4層に酷似する、色調は第4層よりやや暗い
9. 第6層に酷似する、色調は第6層よりやや明るい

0 2m

第7図 A区遺構445・704・B区遺構1001・1003・1013・1015 土層実測図 (S=1/40)

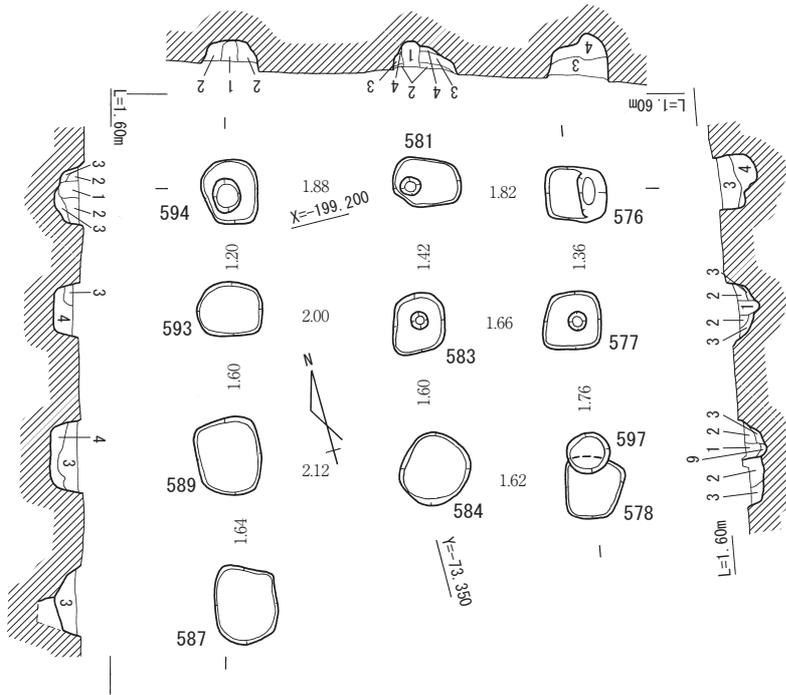
隅丸方形で、残存の深さは約 0.3～0.35 mを測る。埋土は灰色系のシルトである。この建物を構成する柱穴からの出土した遺物の総破片数は 40 片で、古式土師器 38、須恵器 2 片（杯 1、甕 1）であった。

次に中世に帰属すると考えられる遺構について記す。

遺構 003（第 4・6・17 図、巻頭カラー 2、図版 3） 調査地の北東の地山上で検出した。この遺構の最上層からは琴柱形石製品が出土した。形状はほぼ円形を呈し、直径約 0.5 mを測る。残存の深さは約 0.35 mを測る。埋土は 2 層に分層でき、上層は灰白シルトが 5 cm程度の厚みでレンズ状に堆積する。下層は褐灰色シルトに黄橙シルトの 2～4 cm大のものがブロック状に入る。埋土の状況から中世の土坑と思われる。他の出土遺物には土師器破片が出土している。

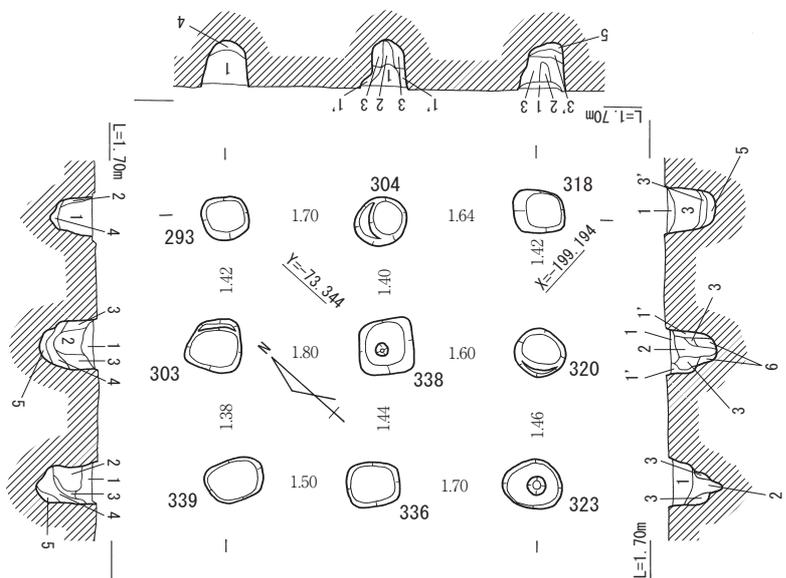
溝状遺構 445（第 4・7 図） 調査区中央で、南北方向の溝を検出した。この溝は調査地に隣接する竈山墓の北側を東流する水路に直交する。幅約 3.5m～6.5mを測り、北側で広がる。残存の深さは北側の最も深い箇所では 0.35 m測り、南側では約 0.40 mを測る。北側では西肩部分が緩やかな 3 段となる。埋土は 3 層に分層できる。上層は 7.5YR4/4（褐）細砂混じりのシルトに 0.2～10cm大の片岩礫が多量に入るといふ、いかにも人為的に埋められた状況を呈す。中層は 7.5YR（明褐）シルトに 7.5YR5/2（灰褐）シルトが混ざる。下層は N6.5/0（灰）シルトである。この溝状遺構からの出土遺物には、どの層からも古墳時代の須恵器や土師器に混じり中世遺物が出土しているため、帰属時期は出土遺物から鎌倉後期と考えられる。なお、北側と南側の溝底のレベルから判断して北流していたと考えられる。この溝からは(45～54)の遺物が出土した。(45～51)は土師器皿である。(45・47～51)は口径 11～12cmを測り、指押え後、軽いナデで仕上げている。色調は灰白色である。(46)は調整が同じであるが、口径が他のものに比べ若干大きく、色調も橙色である。(52)は白磁皿である。高台タタミ付きおよび外面は露胎となる。内外面ともに細かい貫入が見られる。(53)は須恵器壺の口縁部である。(54)は東播系こね鉢である。口縁端部は肥厚する。形状から魚住 22 号窯と同時期と考えられる。また、**遺構 554**や**遺構 124**のピットからも(42・43)の土師器小皿が出土している。口径は約 7 cmで、体部は斜め上方に真っ直ぐ立ち上がる。底部未調整である。

土坑 546（第 4・6 図） 遺構 445 の西側で検出した。規模は南北方向約 2.1m、東西方向約 1.8mを測る。壁はほぼ垂直に掘られ、底は平らである。残存の深さは約 0.85mを測る。埋土は 6 層に分層できレンズ状の堆積を示すが、検出面から約 0.75mまでは、意図的に埋められたと考えられ、褐色系のシルトに 5～10cmの大振り of 礫を多量に含む。底は自然堆積と考えられる青灰色シルトが堆積する。出土遺物は上層からは古墳時代の遺物に混じり瓦器片、最下層からは東播系捏ね鉢(41)が出土している。(41)の外底部には回転糸切り痕が見うけられ、外面横ナデ、内面は丁寧なナデを施している。内底面は使用痕で摩滅している。遺構 445 と同時期と考えられる。



掘立柱建物 1

1. 2.5Y4/1(黄灰色)シルトに10YR6/8(明黄褐色)シルトを不定形な斑状に含む、粗砂及びφ0.2～1.5cmの礫をわずかに含む
2. 2.5Y5/1(黄灰色)シルトに10YR6/8(明黄褐色)シルトと2.5Y4/3(黄灰色)シルトをわずかに含む
3. 2.5Y4/2(暗黄灰色)シルトに10YR6/8(明黄褐色)シルトと2.5Y6/1(黄灰色)シルトをφ1.0cmの斑状に含むφ0.2～3.0cmの片岩礫をわずかに含む
4. 2.5Y5/6(黄褐色)シルト φ0.2～0.4cmの礫を少量含む
5. 2.5Y4/3(オリーブ褐色)シルトに10YR6/8(明黄褐色)シルトがブロック状に含む φ0.2～0.4cmの礫を少量含む
6. 2.5Y6/4(にぶい黄色)シルトに10YR6/8(明黄褐色)シルト・2.5Y6/1(黄灰色)シルト・2.5Y4/1(黄灰色)シルトが混ざるφ0.2～0.4cmの礫を少量含む
7. 2.5Y4/1(黄灰色)シルトにφ4～5cmの2.5Y6/1(黄灰色)シルトをブロック状に含む粗砂及びφ1.0～6.0cmの片岩礫を若干含む
8. 2.5Y4/3(オリーブ褐色)シルトに粗砂をわずかに含む
9. 2.5Y5/1(黄灰色)シルトにφ2.0～3.0cm2.5Y6/1(黄灰色)シルトをブロック状に含む

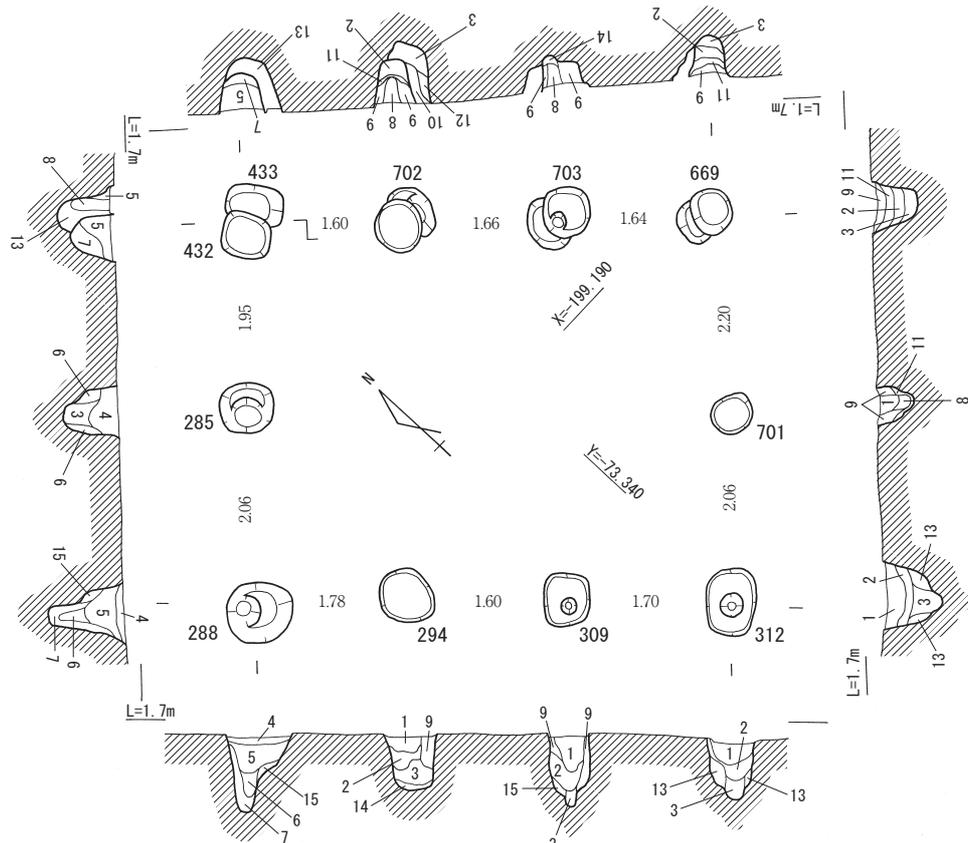


掘立柱建物 2

1. 2.5Y4/3(暗オリーブ色)シルトに2.5Y6/1(黄灰色)シルトをわずかに含む、粗砂及びφ0.2～0.5cmの礫を少量含む
- 1'. 2.5Y6/3(にぶい黄色)シルトに2.5Y3/1(黒褐色)シルトを斑状に含む
2. 2.5Y4/1(黄灰色)シルトにφ1.0～4.0cmの2.5Y6/1(黄灰色)シルトをブロック状に含む
3. 2.5Y4/1(黄灰色)シルト、第2層に酷似する 第2層より黄色味が強い φ0.2～5.0cmの片岩礫をわずかに含む
- 3'. 10YR4/2(暗黄灰色)シルトにφ5.0cm未満の10YR6/8(明黄褐色)シルトを斑状に含む
4. 2.5Y4/2(暗黄灰色)シルトにφ0.2～5.0cmの片岩礫を中量含む
5. 10YR5/6(黄褐色)シルトにφ5.0～8.0cm片岩礫を少量含む
6. 2.5Y5/2(暗黄灰色)シルトに2.5Y6/1(黄灰色)シルトを少量含む



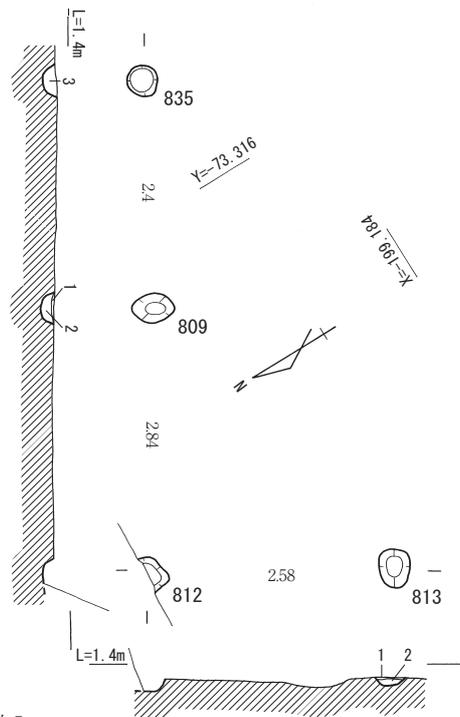
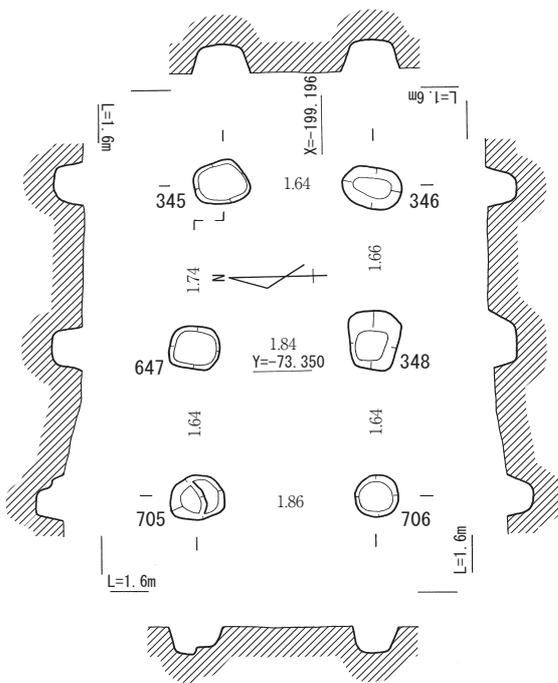
第8図 掘立柱建物 1・2 実測図 (S = 1/80)



掘立柱建物 3

1. 2.5Y5/1(黄灰色)シルト
2. 5Y3/1(オリーブ黒色)シルトに10YR6/8(明黄褐色)シルトとφ0.2~0.8cm 礫を少量含む
3. 10YR3/2(黒褐色)シルト 第2層に酷似するφ0.2~0.8cmの礫を第2層より多く含む 明度もやや第2層より明るい
4. 2.5Y4/3(暗オリーブ色)シルトに粗砂及びφ0.2~0.4cmの礫を少量含む
5. 2.5Y4/1(黄灰色)シルトにφ0.2~0.8cmの礫を少量含む
6. 10YR3/1(暗褐色)シルトに粗砂を少量含む
7. 2.5Y4/2(暗黄灰色)シルトに粗砂を少量含む

8. 2.5Y4/1(黄灰色)シルトにφ0.2~0.4cmの礫を少量含む
9. 2.5Y5/1(黄灰色)シルトにφ0.2~0.4cmの礫と炭化物を微量に含む 第1層に酷似する、第1層より灰色味が弱い
10. 2.5Y5/1(黄灰色)シルト 第9層と酷似する 第9層より褐色味が強くφ0.2~0.8cmの礫の量が多い
11. 2.5Y5/1(黄灰色)シルト
12. 2.5Y5/1(黄灰色)シルト 第11層に酷似する 第11層よりやや褐色味を強く暗い
13. 10YR3/2(黒褐色)シルト 第3層と酷似し第3層より明るい
14. 10YR3/2(黒褐色)シルトと10YR7/8(黄褐色)シルトの混層
15. 2.5Y5/2(暗黄灰色)シルト



掘立柱建物 5

1. 2.5Y5/2(暗黄灰色)シルトに2.5Y5/6(黄褐色)シルトとマンガン粒を少量含む
2. 2.5Y6/2(灰黄色)シルトに2.5Y5/6(黄褐色)シルトを少量含む
3. 10BG5/1(暗青灰色)シルトに10YR3/4(暗褐色)シルトを少量含む



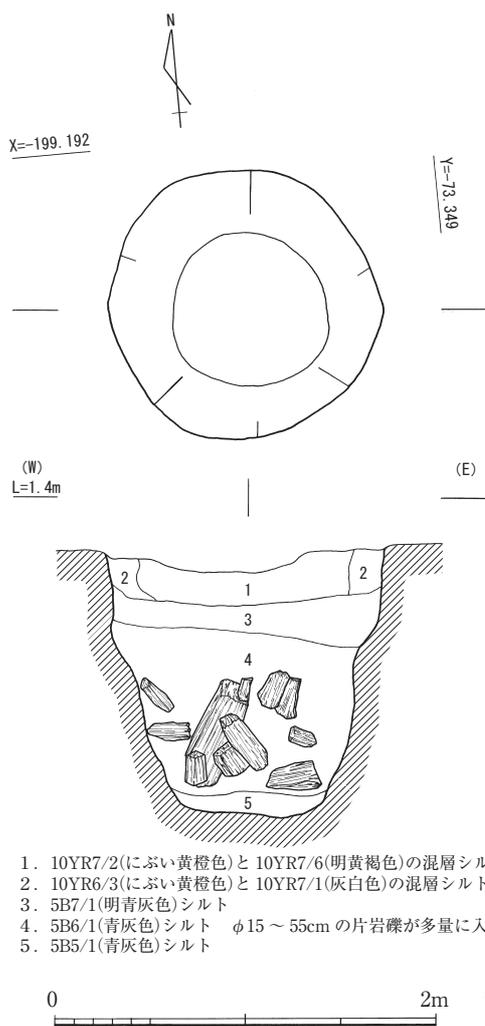
第9図 掘立柱建物 3・4・5 実測図 (S = 1/80)

遺構 250（第4・10図、図版5） 近現代の土坑状遺構掘削後検出した素掘り井戸である。形状は円形を呈し、規模は直径約1.5mを測る。壁はやや斜めに掘られ、底も直径約0.8mの円形を呈する。残存の深さは約1.4mを測る。埋土は4層に分層できたが、基本的には2層である。検出面から約0.25mは黄橙色系シルト、それより下層は青灰色系シルトである。この青灰色シルト層は3層に分層でき、上部の2層には15～60cm大の片岩礫が多量に投棄されていた。従って、自然堆積層は底のシルト層だけと考えられ、上部よりも粘性が強い。出土遺物は黄橙色シルトから瓦器椀2片、須恵器甕1片、青灰色シルト層の上部からは瓦器碗3片、土師器皿1片、土師質土鍋1片が出土したに留まる。落込んでいた片岩礫はかなり大きいことや、殆ど底に近いことから、この遺構の上部周囲に構築されていた可能性が高い。(44)は口径12～13cmのやや小振りの瓦器椀で、キツイ指押さえによる稜が顕著にでる。高台は断面三角形で低い。外面のミガキは稜の凸部に密集する。

遺構 447（第4図） A区北側のコンクリート擁壁の際で検出した東西方向の溝である。西側では遺構445に切られ、おそらく調査区の北側に延びるものと考えられる。幅は0.4～0.5m

で、残存の深さは約0.2～0.3mを測る。埋土は灰褐色系の砂質シルトの単一層である。ここからの出土遺物には(55～61)がある。(55)の須恵器杯身のように中世遺構に古墳時代の遺物が多量に入る。(56～60)は土師器皿で、いずれも体部は斜め方向に緩やかに立ち上がり、器面全体を丁寧なナデで仕上げている。色調は橙色を呈する。(56～59)は口径11cmを測り、底部を円盤状の粘土で貼付けている。(60)は復元口径約15cmを測り、丁寧なナデで仕上げる。(61)は青磁碗の底部である。

遺構 448（第4図） 調査区中程で検出した落込みである。深さは約0.1～0.15mで、北西方向の遺構445上に至る。この落込みは中世の時期に整地したと考えられる。整地土から出土した遺物には(62～66)がある。(62・63)は土師器皿である。双方ともに口径約11cmを測る。(64)は弥生時代後期前半の壺の口縁部で、口縁端部には竹管文が巡る。ローリ



1. 10YR7/2(にぶい黄橙色)と10YR7/6(明黄褐色)の混層シルト
2. 10YR6/3(にぶい黄橙色)と10YR7/1(灰白色)の混層シルト
3. 5B7/1(明青灰色)シルト
4. 5B6/1(青灰色)シルト φ15～55cmの片岩礫が多量に入る
5. 5B5/1(青灰色)シルト

第10図 遺構250 実測図 (S = 1/40)

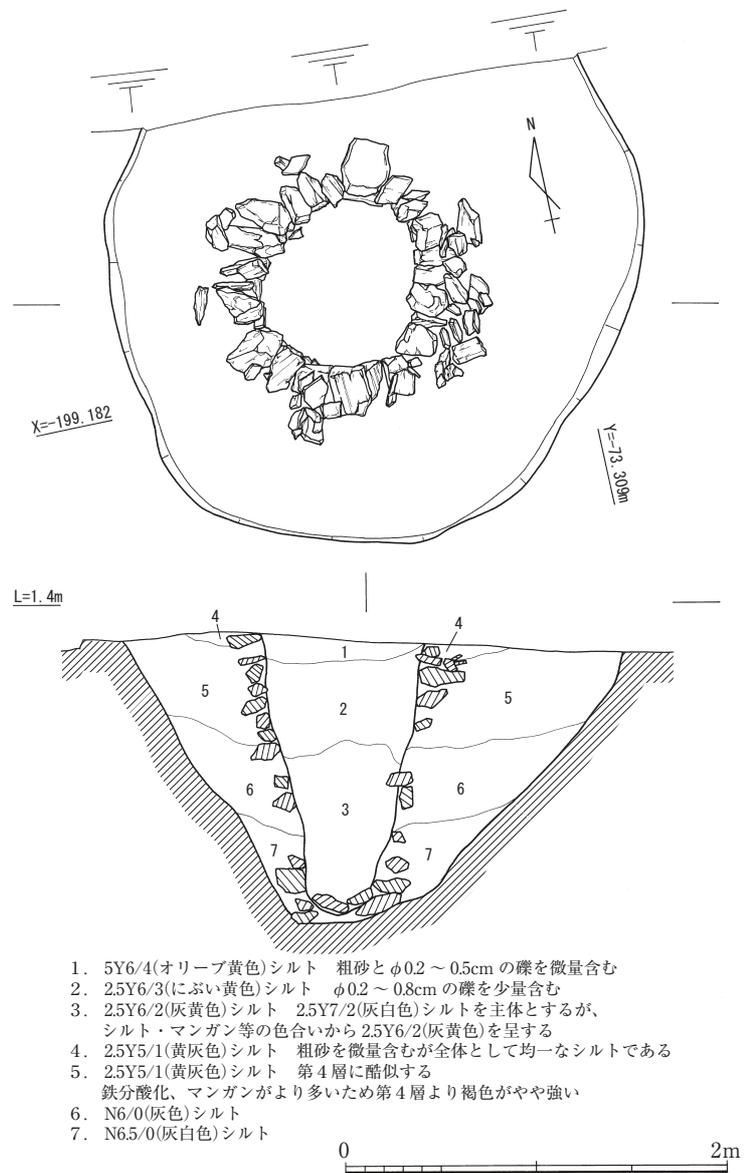
ングが激しい。(65)は土師質鍋の口縁部から体部である。口縁端部は内側に折り曲げる。内面は横刷毛を施す。外面には煤が付着し、頸部直下は粘土紐接合のための指押さえが顕著である。(66)は砂岩の敲き石である。

【A区北側】

検出した遺構は古墳時代の流路、井戸状遺構、中世の掘立柱建物、溝状遺構、土坑状遺構、石積み井戸などを検出した。

遺構 843 (第4・6図、図版3) 西端で検出した土坑状遺構である。形状は楕円形を呈し、長径約1.80m、短径約1.35mを測る。残存の深さは約1.10mを測り、底の高さは標高-0.3mを測る。埋土は6層に分層でき、上層の1層～4層までは弱粘性、5・6層は粘性が強い。最下層には木葉が出土した。この遺構は、平面および断面の形状や湧水があることから、井戸の可能性が十分考えられる。(38・39)はⅡの1段階の須恵器杯身である。(38)は受部に沈線が認められる。(40)は長胴甕の底部と考えられる。他に、ここからの出土遺物には、須恵器杯片や甕片、土師器片など合わせて約90片出土した。

遺構 805 (第4・6図) 古墳時代の流路と考えられる。中世の溝状遺構(802)や石積み井戸(803)と重複して検出した。調査区の東側を南東方向から北西方向に延びる。井戸との重複もあるためトレンチを入れて深さを確認した。南側の肩部は確認できたが、北側については土層の断面形状からわずかに調査区外に至ると考えられる。従って、幅は5.30m強と推測できる。残存の深さは最も深い箇所約0.5mを測る。埋土は基本的に2層に分層でき、上層は2.5Y5/3(黄褐)シルト、下層は

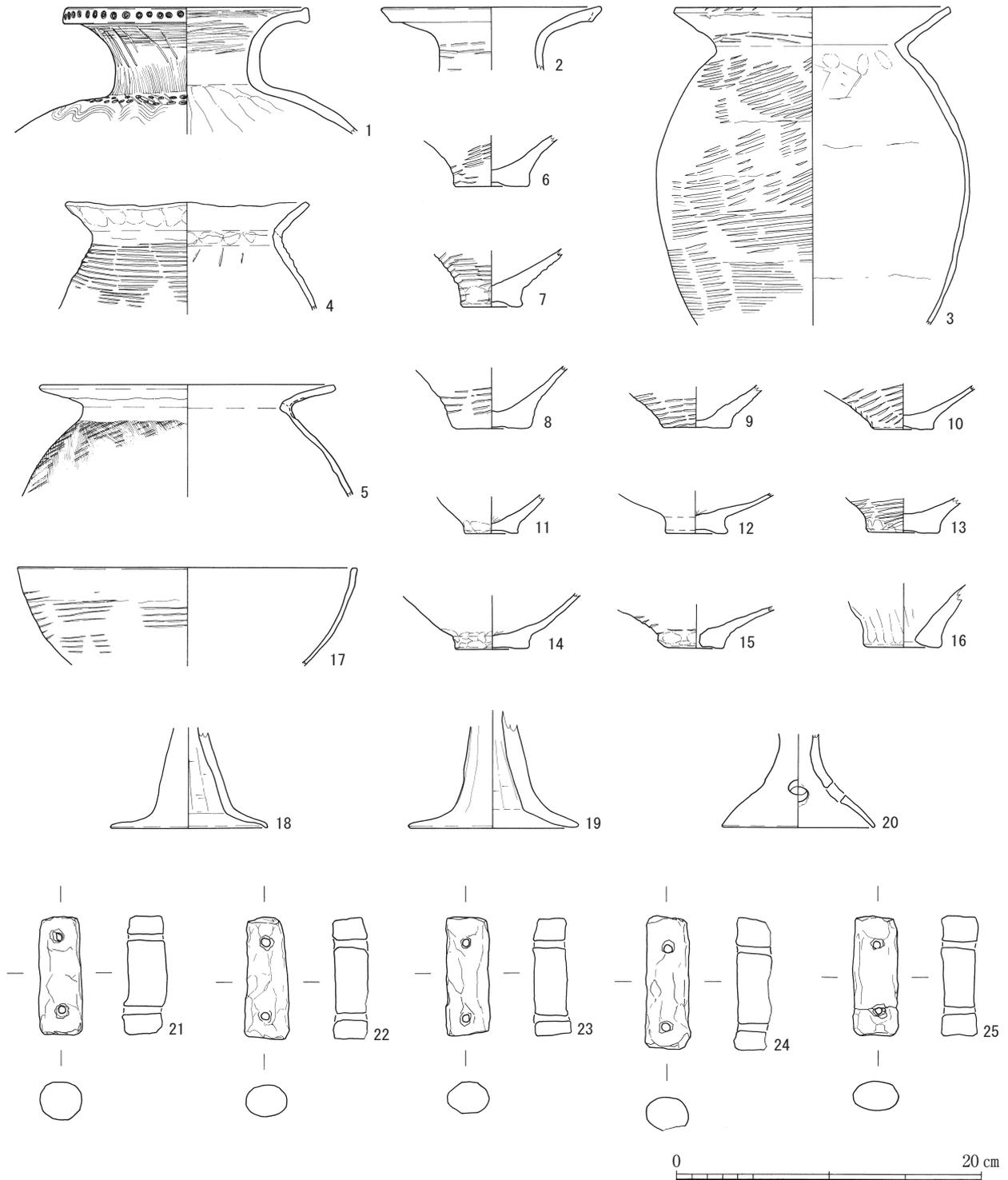


1. 5Y6/4(オリーブ黄色)シルト 粗砂とφ0.2～0.5cmの礫を微量含む
2. 2.5Y6/3(にぶい黄色)シルト φ0.2～0.8cmの礫を少量含む
3. 2.5Y6/2(灰黄色)シルト 2.5Y7/2(灰白色)シルトを主体とするが、シルト・マンガン等の色合いから2.5Y6/2(灰黄色)を呈する
4. 2.5Y5/1(黄灰色)シルト 粗砂を微量含むが全体として均一なシルトである
5. 2.5Y5/1(黄灰色)シルト 第4層に酷似する鉄分酸化、マンガンがより多いため第4層より褐色がやや強い
6. N6/0(灰色)シルト
7. N6.5/0(灰白色)シルト

第11図 遺構803 実測図 (S = 1/40)

10YR3/3（暗褐）シルトが堆積する。ここからの出土遺物には須恵器杯・壺・甕の破片、土師器高坏片などが出土している。

建物5（第4・9図）規模は南北1間（間尺2.58m）以上、東西2間（間尺：東から2.4m、2.84m）である。主軸は25°東偏する。柱穴は直径約0.3mの円形で、残存の深さは0.15～0.2mを測る。この建物を構成する柱穴809と柱穴813から古式土師器の細片4片が出土した。



第12図 A区出土遺物実測図

遺構010：1～25

遺構 803（第4・11図、図版5）遺構805上で検出した。掘方の形状は円形を呈し、直径約2.8mを測る。石材は20～30cm大の片岩礫を使用している。石積の内径は80～90cmを測り、やや楕円を呈す。石材が軟弱なため検出面から40cm弱を人力で掘下げ、あとは埋戻し時に重機で断割って深さを確認した。本体の埋土は黄色系で、上層から5Y6/4（オリーブ黄）シルト、2.5Y5/1（黄灰）シルトである。掘方の埋土は灰黄色系シルトである。断割った結果、石積み断面形は砲弾形を呈し、底で丸くなっていた。検出面からの深さは約1.6mを測り、底での標高は-0.4mである。遺物は掘方から古墳時代の須恵器、土師器などが数点出土し、井戸本体の上層から瓦器片が出土した。

遺構 802 調査区東端で検出した溝である。調査区の北側から南側までの約5.0mを検出した。従って、南北伴に調査区外に延びる。幅は0.4～0.7mを測り、残存の深さは6～8cmと非常に浅い。埋土は10YR7/1（灰白）微砂混じりシルトの単一層であった。

遺構 816・遺構 817・遺構 819は遺存状態の良好でない溝状遺構である。遺構802も含め、これらの溝からは須恵器、土師器の細片が十数片出土したが中世遺物と判断できるものはなかった。

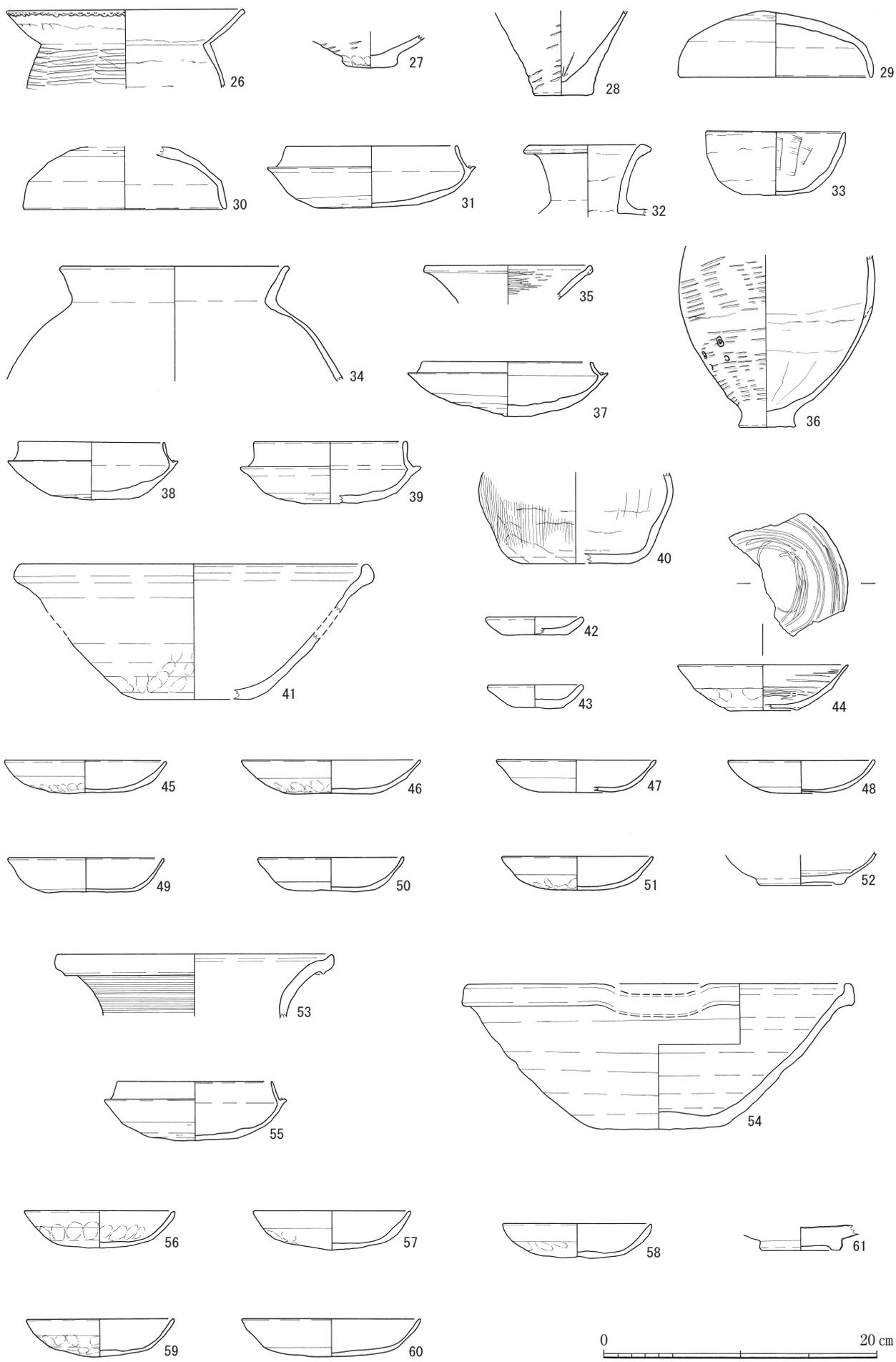
【B区】

この調査区での検出した遺構は古墳時代の土坑1基と中世の溝状遺構がある。出土遺物は、中世の溝から古墳時代の遺物が多量に出土した。

遺構 1007 A区からB区に落ち込む南端の段上で検出した土坑状遺構である。規模は1.4m×1.1mを測る。残存の深さは0.1～0.15mを測る。埋土は2層に分層でき、上層は5YR5/2（灰褐）シルト、下層は5YR6/1（灰褐）シルトである。(67)は須恵器の壺で、(68)はミニチュア土器で、体部は指頭痕が顕著である。底部外面は平らに撫でる。(69)の外面は縦方向の刷毛目調整を施す。小型の甕か。(70)は高坏の脚部で、有稜の大型高坏と思われる。

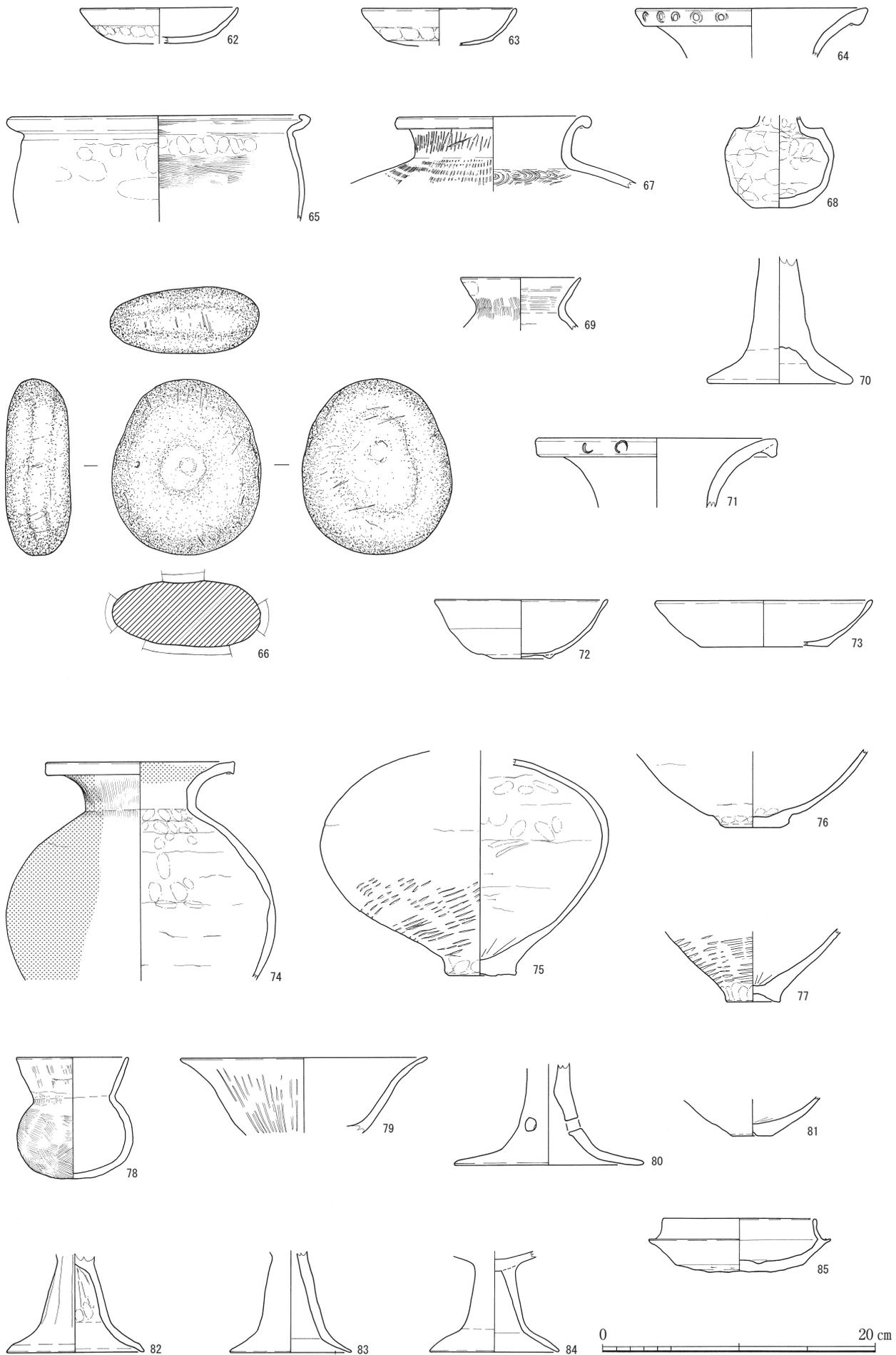
遺構 1003（第4・7図）調査区東端で検出した南北方向に延びる溝状遺構である。検出長は約26mを測り、調査地外に延びる。幅は1.0～1.3mを測り、残存の深さは約0.15mを測る。埋土は単一層で5P B6.5/1（明青灰）である。出土遺物(72)の瓦器椀は摩滅が激しく、内外面の調整が不明である。(73)の土師器皿も器面が摩耗し、ミガキ、暗文が不明である。口縁径は約15cmを測る。底部の形状から糸切り底と思われる。他の出土遺物の破片には古墳時代の須恵器（杯・甕）、奈良時代の須恵器（長頸壺・杯蓋）、黒色土器などがある。

遺構 1001（第4・7図、図版5）調査区の中央付近で検出した。この遺構は溝状遺構と言うよりは流路である。調査区の北から南に掛けて検出した。南側では南西方向に蛇行しているような感がある。幅は最も広い箇所では約7.0mを測り、狭い箇所では2.2mを測る。残存の深さは約30cmで、断面形は船底状を呈する。埋土は2.5Y7/1（灰白）シルトの単一層である。この溝からは瓦器碗、東播系こね鉢、黒色土器、須恵器（杯・壺・甕）、土師器の破片が出土している。



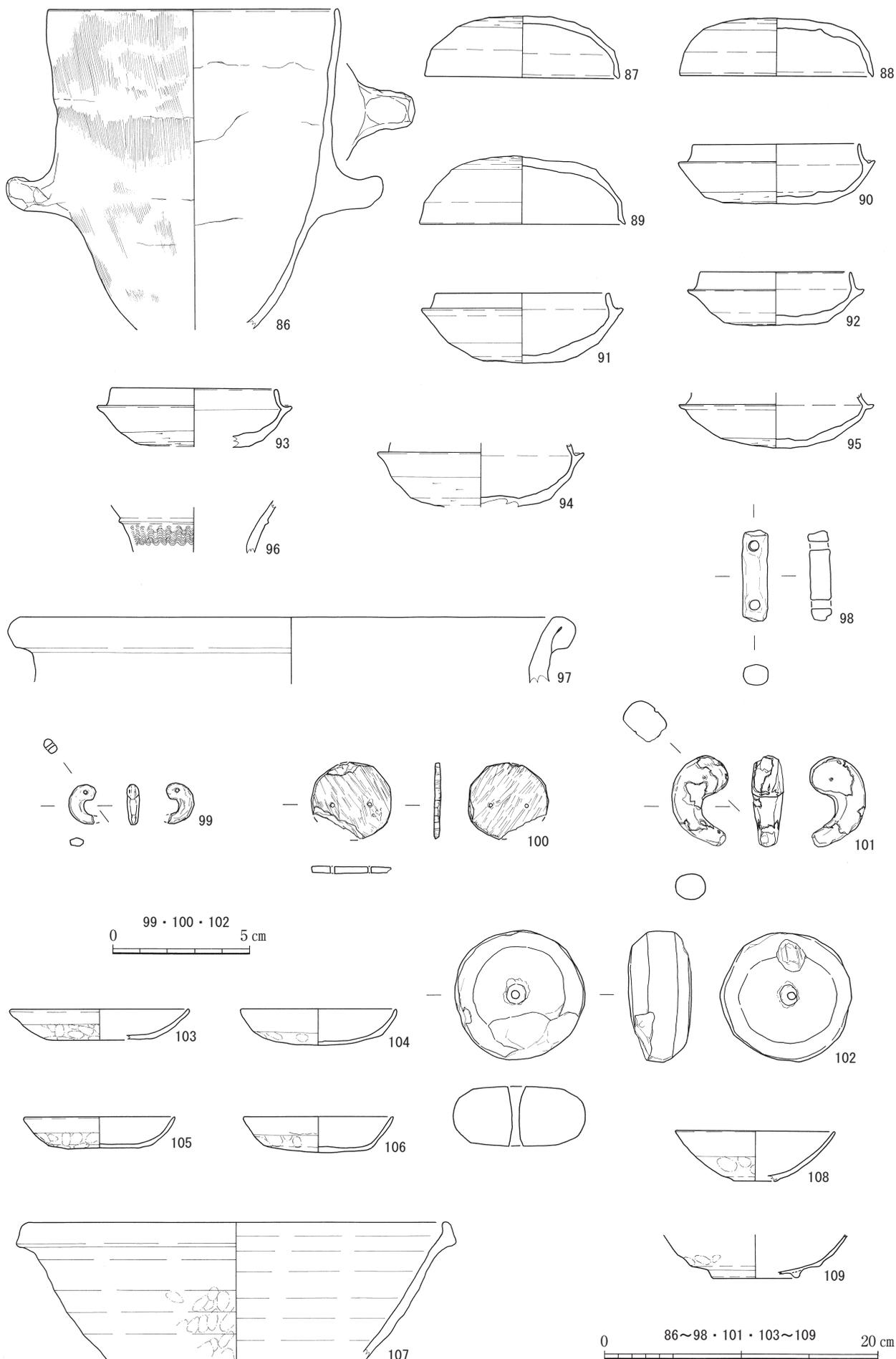
第 13 图 A 区出土遗物实测图

遺構 464 : 26~28、遺構 704 : 29~33、遺構 560 : 34、遺構 230 : 35・36
 遺構 332 : 37、遺構 843 : 38~40、遺構 546 : 41、遺構 554 : 42、遺構 124 : 43
 遺構 250 : 44、遺構 445 : 45~54、遺構 447 : 55~61



第 14 图 A·B 区出土遗物实测图

遗構 448 : 62~66 遺構 1007 : 67~70 遺構 1013 : 71
 遺構 1003 : 72·73 A 区包含層 3 層 : 74~77 A 区包含層 4 層 : 78~85



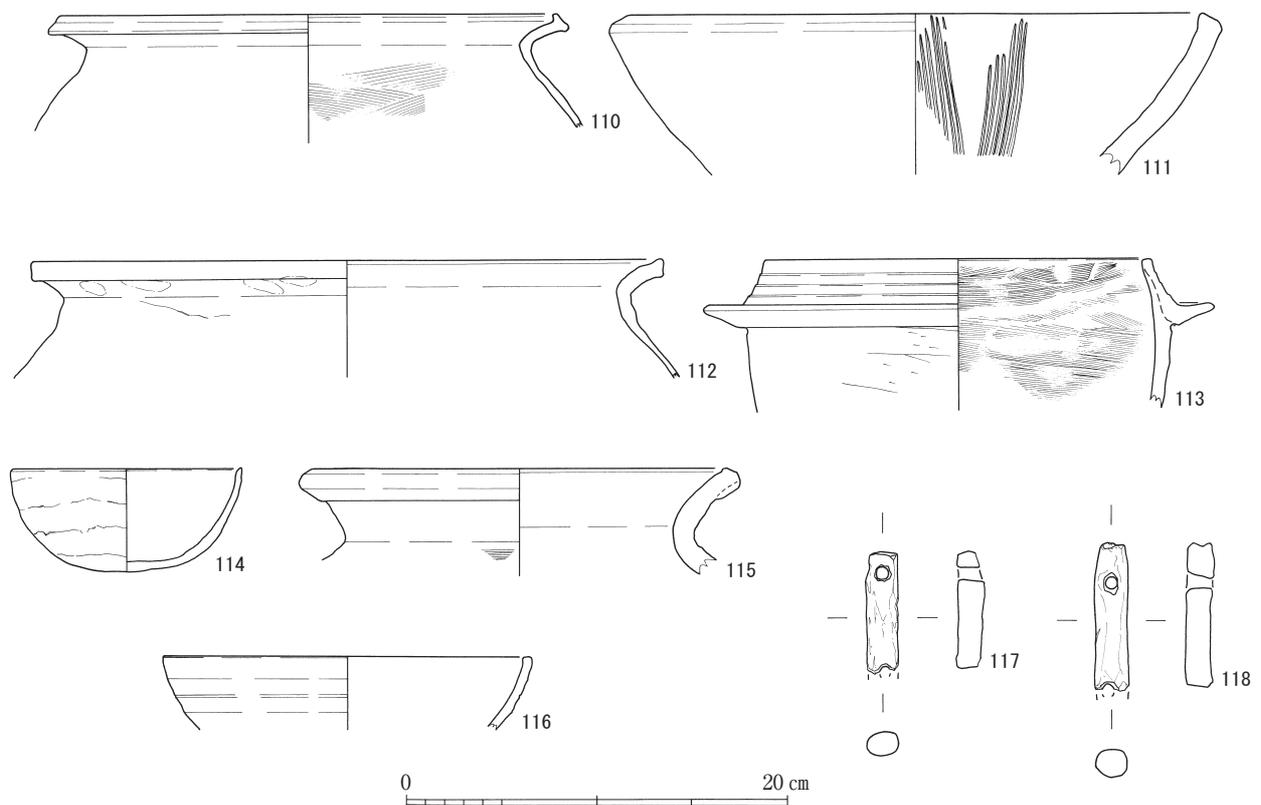
第 15 图 A 区 出土遺物実測図

包含層第 4 層：86 ~ 109

遺構 1013・1015（第4・7図、図版5）これらの2条の溝は調査区の北側で合流する。検出時に前後関係を確認したが、同様な埋土であるため同一のものとした。1013の肩は2段落ちとなる。残存の深さは1013では約0.35 m、1015では約0.3 mを測る。埋土は基本的に単層の10YR3/1（黒褐）を呈する。この双方の溝も遺構1001と同方向に蛇行している。

この調査区で検出した溝群はその底のレベルから北方向に流れていたと考えられる。(71)は弥生時代中期後葉～後期前半の垂下口縁の広口壺と思われる。口縁に竹管文を施す。出土遺物はこの広口壺のみであった。

【A区包含層の出土遺物】(74)は庄内併行期の広口壺で、頸部は短く体部は丸い造りである。(75)は弥生時代後期後半の細頸壺である。器面は摩耗して調整は不明確である。(76)は弥生時代後期後半の壺である。(77)は布留式古段階の甕である。(78)は小型丸底壺で、外面刷毛調整を施す。布留式中～後半である。(79)は有稜高坏である。(80・82～84)は高坏脚部で、いずれも器面の摩滅が著しい。(80)は庄内～布留の時期、(82)布留式2・3の時期である。(83)は布留式以降の時期。(84)は胎土精良で、裾部が内湾する。布留式1・2の時期である。(81)は鉢である。(85)はⅡの1・2段階の須恵器杯身である。(86)甑は器面が激しく摩滅する。外面は刷毛調整で、扁平気味の把手がつく。(87～89)は須恵器の杯蓋である。いずれもⅡの2段階の時期である。(90～95)は須恵器の杯身で、(90～93)はⅡの2段階、(94・95)はⅡの4



第16図 A・B区 出土遺物実測図

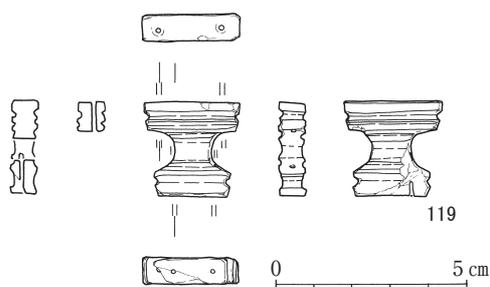
A区包含層4層：110～113、
B区包含層3層：114～117、B区包含層4層：118

段階と思われる。(96)はIの4段階のハソウである。(97)は備前焼甕の口縁部である。14世紀後半から15世紀初頭である。(98)は瀬戸内式の土錘である。(99)は勾玉で、石材は滑石である。(100)は有孔円板で、石材は緑泥片岩である。(101)は軟質岩の勾玉で、表面が白く風化し、穿孔も貫通していない。未製品と思われる。(102)は土製の紡錘車である。(103～106)は口径11cm内外を測り、(103・104・106)の色調は橙色、(105)は灰白色である。(107)の東播系こね鉢は、体部から口縁部にかけて緩やかに外反する。13世紀初頭の時期である。(108)(109共に器面の摩滅が激しい。(108)は瓦器椀、(109)は黒色土器椀A類である。(110・112)は土師質鍋で、(110)は器面が摩滅している。(111)は乗岡編年の中世3期aの備前焼播鉢である。(113)は瓦質羽釜である。鏝部が二次焼成を受け赤色化する。(114)は土師器椀である。粘土紐接合痕が顕著に観察できる。(115)は須恵器の中型甕である。(116)は黒色土器椀A類である。(117・118)は有孔土錘である。(119)は滑石製琴柱形石製品である。

【003 出土の琴柱形石製品について】過去、和歌山県下で出土した琴柱形石製品は、出土状況が不明確なものも入れると3例があり、本例も入れると4例目となる。3例の出土地はいずれも古墳からで城山古墳、八王子山古墳、丸山古墳である。次に過去の出土状況を簡単に記す。

① 南部町所在の城山古墳は、大正4年に真福寺の裏山の標高20mの小丘陵で赤土採掘中に偶然発見された。古墳の規模は封土の殆どを失っているが、残存部からの推定によると直径10m、高さ2mの円墳であった。内部主体は硬質砂岩の組合式箱形石棺で両端に副室をもつ。出土遺物は仿製四獣鏡、銅鏃、鉄剣などがあり、この時いっしょに多くの玉類や琴柱形石製品も出土したということであるが、今はその所在が不明である。また、石棺の石材もいつしか持ち運ばれて消滅している。(註1)

② 和歌山市所在の八王子山8号墳は、和泉山脈南麓の標高101.8mの八王子山と標高103.5mの妙見山の稜線上に位置する。関西大学考古学研究室が昭和51年～昭和54年にかけて分布調査並びに発掘調査を実施した。この内の第IV次調査時の8号墳から出土した。墳丘の確認はできなかったが、東西に主軸をおく墓壇3基を確認している。この第3墓壇から鋸歯文鏡、鉄剣、刀子、玉類等と共に琴柱形石製品が出土している。(註2)



③ 紀の川市所在の丸山古墳は貴志川左岸の上位段丘に位置する。直径20～25m、高さ7mの円墳である。内部主体は組合式箱式石棺で長辺に副室をもつ。昭和8年の出土状況では、人骨、鉄鋌、鉄鉢、直刀、玉類、埴輪、琴柱形石製品などが報告されている。(註3)

第17図 琴柱形石製品実測図 遺構003 巻頭図版2

第4章 まとめ

以上、調査区毎に主だった遺構について検出状況を記述してきた。今回の調査は大きく2地区に分かれ、この地形的な違いが遺構密度に反映した。

A区は中世と考えられるピット状遺構が大半であったが、時期的には古墳時代、古代、中世の遺構と多種多様な遺構を検出した。B区においては溝状遺構群を検出しただけに留まった。この状況から微高地には集落が展開し、低地は湿地帯であったと考えられる。

〔古墳時代の状況〕 A区の第3層、第4層とした片岩礫の入った層を中世の整地土と考えている。ここからはもちろんのこと中世の遺物が出土しているが、古墳時代の遺物が多量に出土している。目立って多いのが弥生時代後期、庄内併行期～布留式、5～6世紀の古墳時代の遺物である。このような出土状況から、この微高地に営まれた弥生時代後期～古墳時代の遺構が中世の時期に削平され、大きく土地改変がなされた可能性が高いものと考えられる。A地区の包含層第5層から出土した勾玉や有孔円板、土坑003から出土した滑石製琴柱形石製品、A区北側の第4層から出土した軟質岩製土製勾玉などからも十分証明できる。出土した、琴柱形石製品は古墳の存在を示唆するものであるが、周辺に多くの古墳が存在することと関連性があるのであろうか。何らかの事情で土坑状遺構から出土したのであろう。今回の調査では古墳時代の集落遺跡と決定づける堅穴住居を検出できなかったが、立派な掘方の掘立柱建物を4棟検出できた。これらの建物が、出土遺物から古墳時代に帰属するとは断言できないものの、何らかの施設が存在したと考えられる。先にも記した土坑状遺構(843)はその形状や規模、深さなどから井戸と考えられることから、この地に古墳時代の集落が展開されていた可能性は十分高いと言える。

〔古代の状況〕 古代の遺物は判別できるものは奈良時代の須恵器や平安時代の黒色土器が僅かしか出土しなかった。しかしながら、今後の周辺の調査において、この時期の遺構の存在に期待がもたれる。

〔中世の状況〕 調査地全体に渡り遺構、遺物を確認した。遺構はA区でピット状遺構を無数に検出した。これらは並びの方向性はあるが、建物を建てるに至らなかった。井戸はA区の西端とA区北側で検出した。このようなピット状遺構や井戸の検出状況から、微高地には中世集落が展開されていたことが確認された。その成立時期は、出土遺物から鎌倉時代後期～室町時代前期までと考えられる。

坂田遺跡は新規認定の遺跡で、今回の調査が初めてで、遺跡の解明には十分な成果を出すには至らなかったが、古墳時代、古代、中世の3時期に画期があったと判ったことが、今回の調査の成果であったと考えられる。調査地の北側には、まだまだ遺跡が展開するものと思われ、次に調査の機会があれば、各時期の集落の展開範囲が明瞭になることが期待される。

報告書抄録

ふりがな	さかたいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	坂田遺跡発掘調査報告書							
副書名	県道三田三葛線道路改良工事に伴う発掘調査報告書							
編著者名	佐伯 和也							
編集機関	財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	〒640-8246 和歌山県和歌山市湊571-1 TEL073-433-3843							
発行年月日	西暦2011年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかたいせき 坂田遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 さかた 坂田	3020150	435	34° 12' 7"	135° 12' 17"	2009年 11月12日 ～ 2010年 3月12日	1,947㎡	県道三田三葛 線道路 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
坂田遺跡	集落跡	弥生時代後期～ 古墳時代中世		溝・土坑 溝・土坑・ 井戸・掘立柱 建物等		弥生土器、土師器、 須恵器、 琴柱形石製品、勾玉、 有孔円板、紡錘車、 黒色土器、瓦器、 土師器皿、東播系こね鉢、 備前播鉢、青磁碗		古墳の存在 を示唆する 琴柱形石製 品が出土し た。県下で4 例目である。
要約	調査地は微高地と低湿地に大別でき、微高地では弥生時代から古墳時代にかけての溝や土坑、中世の掘立柱、溝、土坑、井戸などの遺構が検出された。これに伴う遺物も出土したが、殆どの遺物は著しくローリングをうけ、小破片が多い。低湿地においては、中世の溝状遺構を数条検出しただけに留まった。ここから出土する遺物もまた、著しいローリングが認められ、いずれも小破片で実測に耐えうる遺物は少量であった。							

(註1) 南部町史通史編 第二巻 編集 南部町史 編さん委員会 発行 南部町 平成9年9月11日発行
熊野路考古 南紀考古同好会 1964年

和歌山市橘谷遺跡 IV発掘調査概要 関西大学考古学研究室 1979年3月発行

(註2) 和歌山県史考古資料 編集 和歌山県史編さん委員会 発行 和歌山県 昭和58年2月25日発行

(註3) 和歌山県史考古資料 編集 和歌山県史編さん委員会 発行 和歌山県 昭和58年2月25日発行

貴志川町史 第一巻 通史編 編集 貴志川町史編集委員会 発行 貴志川町 昭和63年4月1日発行



1、調査地近景
(東上空から)



2、調査地近景
(西上空から)



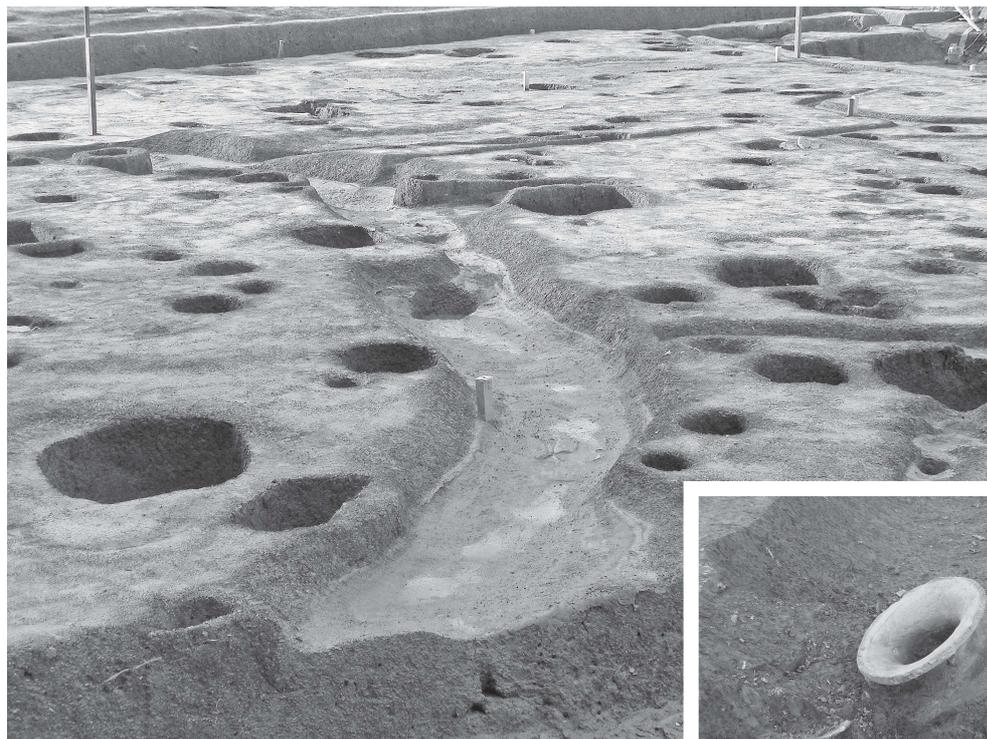
調査区全景
(東から)



A区北側全景
(西から)



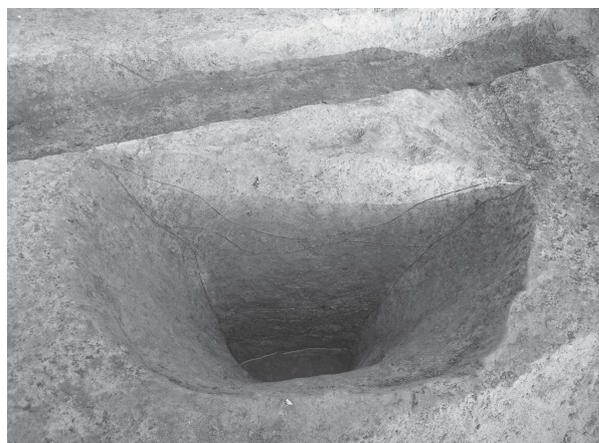
A区東側全景
(東から)



A区遺構010(溝) 完掘状況(東から)



001内 土器出土状況(西から)



A区北側遺構843(土坑) 土層堆積状況(東から)



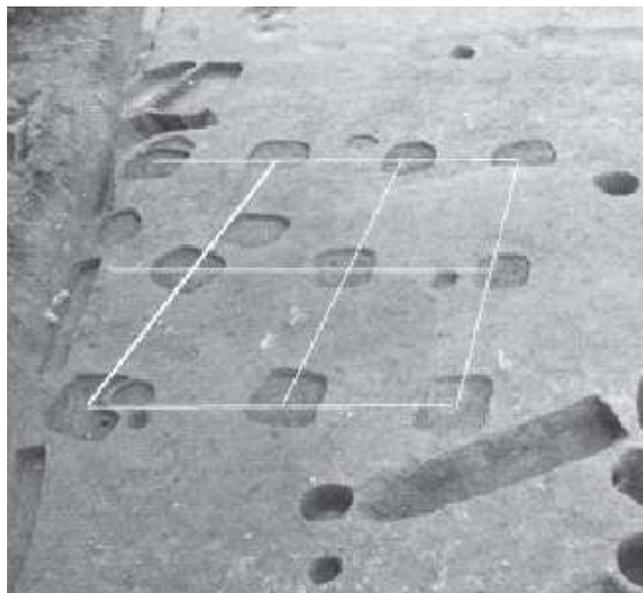
A区遺構003(土坑)(北から)



843 完掘状況(東から)



003内 琴柱形石製品出土状況



A区掘立柱建物 1 (東から)



A区掘立柱建物 2 (南西から)



A区掘立柱建物 3 (南西から)



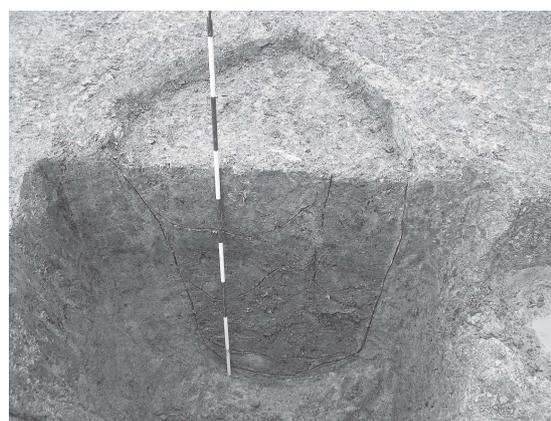
掘立柱建物 1 柱穴 589 断割 (西から)



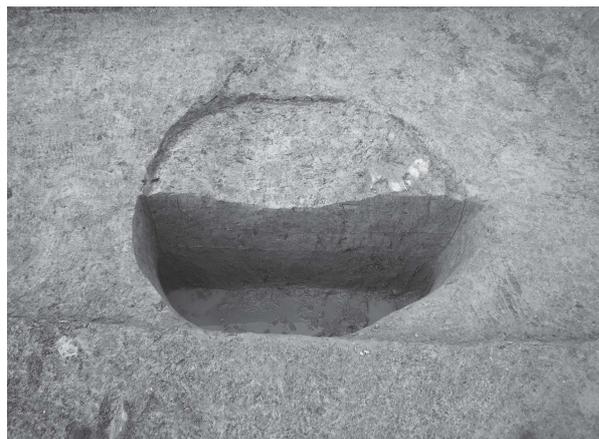
掘立柱建物 2 柱穴 304 断割 (西から)



建物 5 (東から)



掘立柱建物 3 柱穴 294 断割 (南から)



A区遺構 250 (井戸) 検出状況 (南から)



A区遺構 803 (井戸) 検出状況 (北から)



250 断割状況 (南から)



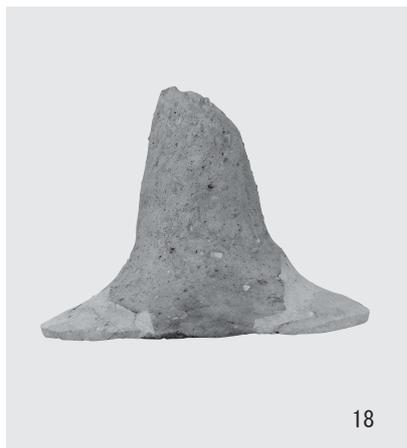
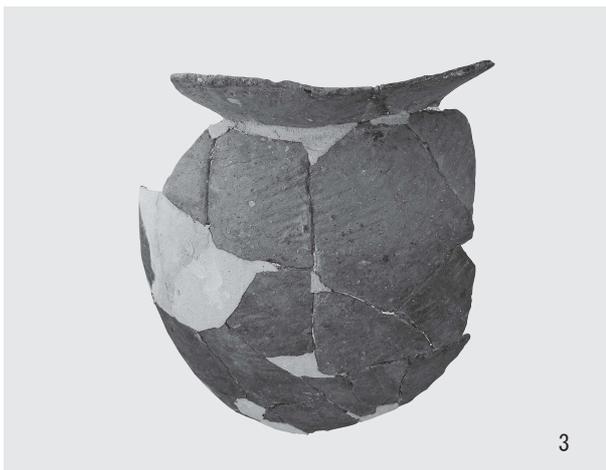
803 断割状況 (南西から)

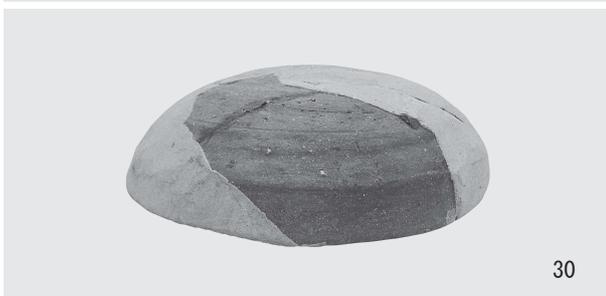
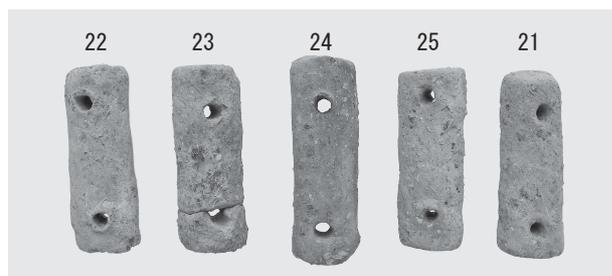


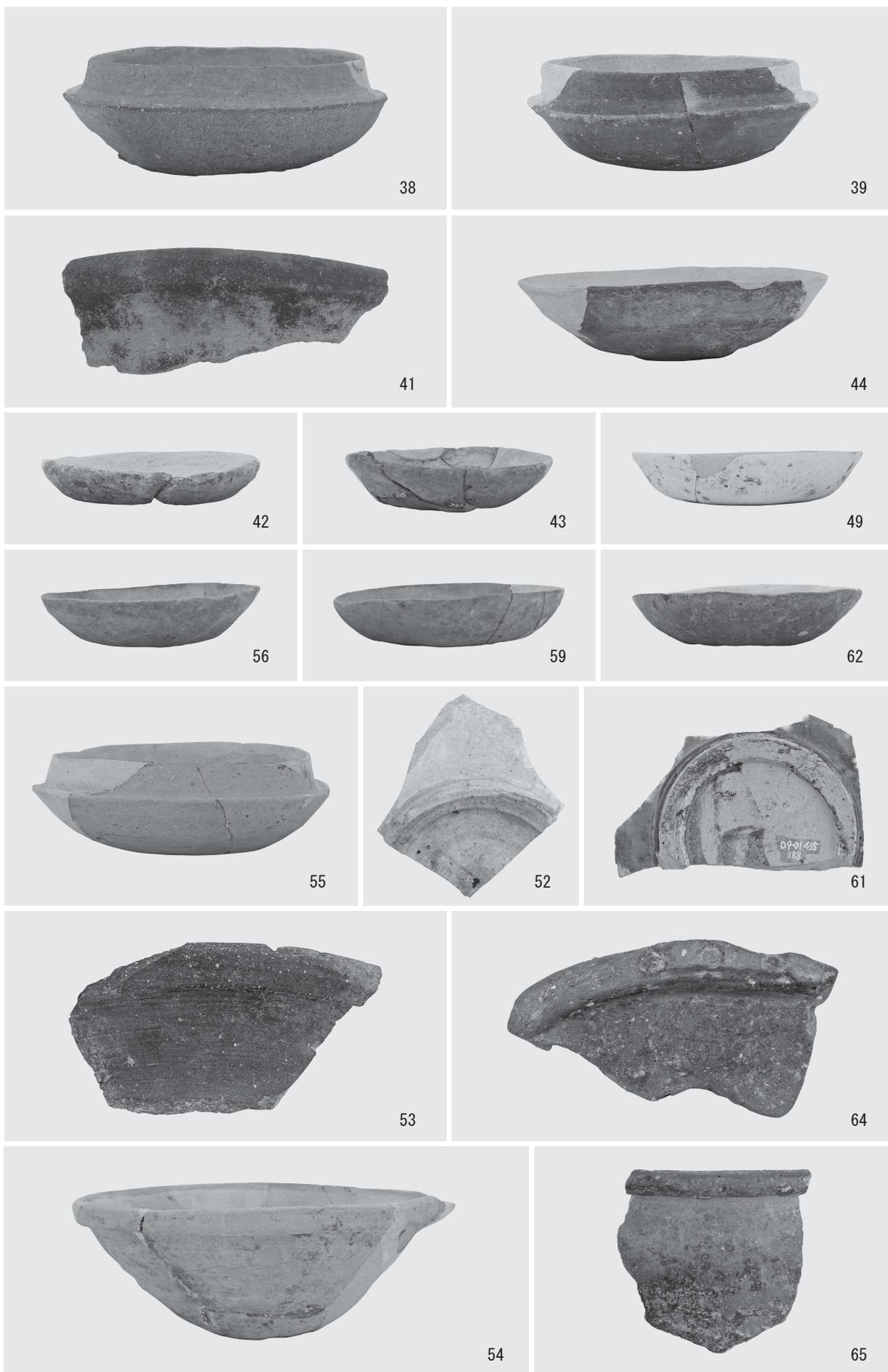
B区遺構 1001(溝状遺構)・1015(溝状遺構)完掘状況(北から)

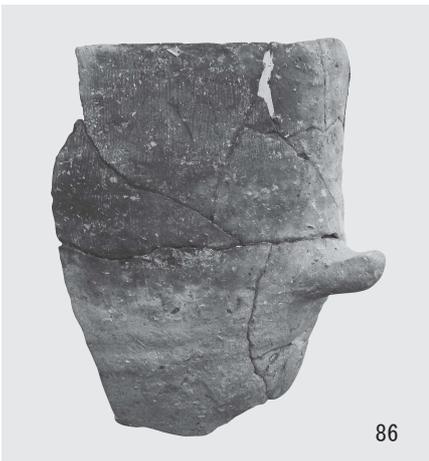
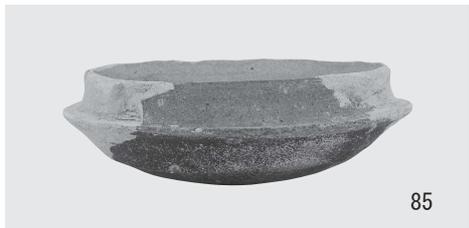


B区遺構 1013(溝状遺構)・1015(溝状遺構)完掘状況(北東から)











坂田遺跡

—県道三田三葛線改良工事に伴う発掘調査報告書—

2011年3月25日

編集・発行 財団法人 和歌山県文化財センター

印刷・製本 株式会社 協和

